
three 龍の血を持つ娘

Knight bug

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

three 龍の血を持つ娘

【Nコード】

N7245U

【作者名】

Knight bug

【あらすじ】

あの時あの場所で、私達が出会わなかったら、こんな事にはならなかったのかも知れない。

五才だった優太と百合香が攫われた。

そんな矢先、幼い2人を拐った赤い双眸の男。男は、優太の銀髪と灰色の瞳を見て「竜の血を持つ娘だ」そう言って優太の血を蒼い小瓶に入れた。

あの言葉の意味を考えながら2人は、それぞれ別の事を胸に秘めて

生きて来た。

もし自分が百合香だったらどんなに良かったんだろうか・・・。

ただ守られる存在なら、女の方がまだマシだ。

もし、私が優太だったら、どんなに良かったんだろうか・・・。

好きなあの人と肩を並べて笑えるのに・・・。

その思いがもし、叶ってしまったら・・・。

プロローグ

百合香

男嫌いな性格が災いしてか、某有名私立女子校に初等科の三学年時に編入学。

性格は、大人しいと周りの友人達は、声を揃えて言うが．．．。巨大な猫を頭の上に飼っていた。

趣味は、お茶に日本舞踊と言っているが．．．。弟の優太の話に寄れば、今はもっぱら空手と合気道だと言っている。

百合香の男嫌いの原因は、優太と一緒に誘拐された時に起こったあの出来事からだった。

優太

双児の弟で、自分では世界一不幸な男だと言っている。

性格は、温厚過ぎて、よく百合香からダメ優太といつもなじられている。嫌とは言えない腰が低い男である。相手の事を自分の事のように考え行動する、お人好しタイプ。潔癖性。

趣味？ 姉のお陰で趣味を作る暇が無くなった。姉の時間が俺の趣味なのか．．。今の所は百合香の影武者と言うか、女装だな。

神谷 トオル

優太の悪友であり、幼馴染み。

雲のようにフワフワとしていてつかみ所のない男。

百合香だけを幼少の頃から、百合香だけを見つめて来た。

いつか、百合香に告白する事を夢見ている。

来年は、百合香と同じ高校に進学する事にした。
趣味は、ピアノ。

持田 綱吉

優太と百合香の叔父。性格は、良い性格だと本人は言っている。温厚派。

特技、優太を懲らしめる事。結構サドである。
ガーディアンとして優太を守る為に、百合香の補助役を勝手にでている。

小田マリア

百合香の親友であり、優太の事を恋いこがれている女の子。ようやく自分の思いに気がついてくれた(?) 優太から、卒業式に学ランをプレゼントしてもらった。

性格 とても大人しい。百合香曰く、マリアは優太を女にした感じと言う事だ。

ジェイ

ボックスに入っていた竜。

無事、優太に名前を付けてもらい召還成功！

流れるような銀髪に銀色の瞳を持つ少年に姿を変えた。

レオン

百合香が持っていたボックスに入っていたもの。

高飛車な言い方をして来る

プロローグ（後書き）

初めて異世界物を書き始めました。
誤字脱字の箇所がありましたら、教えてください。

憂鬱 優太の溜息

今でも思い返せば、あの時あの場所を通らなかつたら、こんな事に巻き込まれる事は無かつたのかも知れない。

あの日、家を出るのに後5分早かつたら、いつものバスに乗ってピアノ教室に行っていたのに・・・。

そうしていれば、あのボックスを拾う事も無かつたのに。

悔やんでも悔やみきれない自分の運命。

神様・・・やっぱり私って不幸だね。

半年くらい前のことだった。

溜息をつく百合香に、弟の優太が暢気そうに歯を磨いている。

「姉ちゃんつてば、何 乙女ごっこやってんだよ。学校に遅刻するよ！早く！」

慌てて、セーラー服のスカートを結ぶと2人は急いで家を出た。

百合香が溜息をつくのは、決まって女子校行きのバス停に百合香目当ての近所の男子校や中学の男子生徒達が群がって居るからだ。タダでさえ、男嫌いの百合香は優太や親しい幼馴染みのトオル以外の男に近寄られるのが耐えられないのだ。

二丁目の角を右に曲がった百合香は優太に「今日は、優太あんたが夕飯の当番なんだからね！忘れないでよ！」そう言つと走って親友の小田マリアに駆け寄って行った。

「御機嫌よう。マリア」

「御機嫌よう。百合香！」

百合香は、マリアと一緒にバス停に向ってゆつくりと歩いて行った。

優太は、姉百合香の言葉に「げ！覚えてやがったのか……。ったく、色気も無いくせに、食意地だけは張ってるんだよね。あんなんで恋人とか出来るのかあ？」ブツブツ言っている優太は、幼馴染みの神谷トオルに学生鞆でボコツと朝の手荒い挨拶を受けた。

「ッ！痛！んだよ！トオル テメエ！毎朝、鞆で人の頭叩くことねえだろ！」

フフンと鼻であざ笑うかのようにトオルは、流し目で角を曲がって行った優太の姉百合香を見ていた。

ぽおっと赤くなる頬。そんなトオルを見て優太は「こんなことしてんのが、百合香にバレたら、それこそトオルは百合香に嫌われるかもな。イシッシッシ。」ニヤリと笑う優太に、すぐさま抱きつくトオルは、優太の陶磁器のように白い頬に自分の頬を擦り寄せた。ぞわぞわとする感触。優太は、鳥肌が立って来た。潔癖性の優太はとにかく人に無断で触られるのが一番嫌いなのだ。百合香は別なのだが、それはもちろん姉だし、年がら年中一緒に一つ屋根の下で暮らしていれば、そんなのは関係ないのだろう。だが、例えば友達でも肌に直接触られるのだけはゴメンだ！！

「どわあゝ！！ 触んな！俺がそういう趣味じゃないのはお前がよく知ってんだろ！トオル！」

トオルは、ニカツと笑うと鞆を後ろ手に持って、空を見上げながら一緒に歩いている。

「ワリーワリー。でもさゝ何で百合香ちゃんは、こっちの中学に通わないんだ？俺、絶対に彼女の事を守ってやるのにさゝ」

トオルは、俺の近所に住んでいる。腐れ縁も腐れ縁。トオルのお袋さんと俺の母さんは、百合香と同じエスカレーター式の学校で、幼稚園から大学まで一緒に、しかも親友だった。そのトオルは、俺の隣に住んでいる。見た目スポーツ馬鹿だが、勉強はそれとなしに出来るようだ。学年で20位に入っていれば、何処の高校も大丈夫だろうと担任に言われたからさ」と言っていたしな。

問題は、この担任……。あいつの事を考えるとまた頭が痛くなつて来たぜ。

「百合香？共学に興味が無いのは、お前だって知ってたろ？アイツは、根っからの男嫌いだ。俺達が双児で、しかもそっくりって言うのだって、嫌なのにな。何でまた百合香と一緒に暮らさなきゃなんねーのか……。」

「え！？お前、百合香ちゃんと2人つきりで同棲してんのか？」

トオルの勘違いにも甚だしい言い方に、俺は白い目でトオルを見る。両肩を落とした俺は、言ってしまった事に後悔したが、トオルに俺達姉弟がどうして一緒に住む事になったのかを話始めた。

俺が言うのもなんだが、俺の顔は、双児の姉百合香にソックリだ。そのまま百合香の学校の制服を着れば、百合香に間違えられる確率150%だが、百合香は俺と一緒に共学の中学ではなく女子校に入った。しかも、初等部からだ。詳しく言えば、初等部に編入したつて言った方が良いな。

成績優秀の俺と比べられるのが嫌だと言うのと、女子校の方がのんびりして気兼ねなく出来るからって本人は言っていたが。

しかし、その百合香が通う女子高だって、ここの地域ではかなり難易度の高いお嬢様学校だ。そんな所にすんなり入れるのか？　な

んて思ったら、百合香の編入試験日の前日に、百合香が俺の部屋にいきなり入って来た。

「優太！一生のお願い！私の代わりに試験を受けて来て！　さもないと……こうするわよ！」

「ぐええー！！」

もちろん、俺は断ったさ。だが、秒殺で百合香に羽交い締めになれ、言う事を聞くはめになった。

結果は、もちろん合格。しかも、成績優秀な俺様だったから、百合香は中等部の新入学生の挨拶を任される事になった。だけど、このお嬢様学校の編入試験って、面倒臭いんだよな。筆記は勿論だが、同じ編入試験を受ける人達と混じって昼飯を食べるのだが、其処でも試験官の目が厳しい。どんな動作も逐一調べられているって感じで、俺はその時モルモットになってしまった気がした位だ。

運動能力テストもあって、一日かけての編入試験が終わった時には、どっと疲れが出た。この学校の編入試験は、学校を出たら終わりではなく、家に蛙まで続くのだ。今回の編入試験を受けた人数は全部で10人。

合格したから良かったものの、これで落ちていたら、俺百合香に殺されるってマジに思った位だ。

ホッとしたのもつかの間、俺の不幸は、ここで終わっていた訳ではない。

試験の度に借りられる訳にはいかないから、百合香の勉強を俺が見る事になった。百合香も成績をキープしておかないといけないと言う事で、必死になって勉強していたな。そうしないと、変わり身がバレてしまうからな。お陰で中等部も今の所、学年トップだと言っている。

それは、俺の唯一の趣味である魔術書の本を解読する事が出来なくなるという事だった。

両親達は、百合香よりも俺が居るからと言う事で、今年から海外に仕事で行く事になった。

そう言う訳で、俺達 姉弟が一つ屋根の下で一緒に過ごしている訳だ。

始業のベルが鳴る前に、急いで教室に入ると、百合香目当ての野郎達が俺の所にやって来て、「百合香ちゃんに、こ、これ渡してくれよ。」そう言っつて、俺にラブレターを渡して来た。そんなのが毎日だ。嫌になつて来るぜ！

HRも終わり、俺は大きく伸びをしながら、今日の夕飯の事を考えていた。手を抜いたら、ソレこそ百合香にコブラツイストで締め上げられるかも知れないと考えると眉間に皺を寄せて、溜息をついていた俺。

いつの間にか授業が始まっていたらしく、モッチーが教壇に立っていた。教科書を見るでもなく、ただ外の雲をぼくと見ていた俺は、カリカリと隣の席から珍しく聞こえて来る音に、気付いた。

（もうすぐ試験だからって、何やってんだか。）

溜息をつきながらも俺の隣の席にいる、間抜け面のトオルを見ていた。

トオルは、何やら机の上の紙に、高校の名前を書いていた。ん？その高校つて聴いた事があるけど、何処だっけ？

そう考えてじつと、トオルを見ていたら、アイツ いきなりニカツと笑いやがって……。

「イヤ〜ン！。 優太 見るなよ。エッチ」

目が点になった俺は、真っ赤になった顔でガタンと大きな音を言

わけて立ち上がると、いきなり数学の先生から笑顔で言われた。

「お！レオンが解いてくれるのか。じゃ、前に出て来て解いてくれ」

レオン。そう俺が一番嫌がる名前。

優太と百合香の祖父はイギリス人で名前がレオンハルト「ホワイトウイングナー」と言う人だ。代々、ホワイトウイングナーの一族は祖父と同じ名前を男にそして、女は祖母と同じ名前を付けるのが習わしとなっている。優太も百合香も、日本生まれだが、毎年夏はホワイトウイングナー家があるイギリスへ行く事になっている。ま、それはさておき、名前だがレオンハルトは俺のミドルネームだ。百合香はペトロと言われているが、祖母はロシア人だった。ちなみに祖母の名前はナターリア「ペトルーシユカ」ウォルグスキー（旧姓）。

俺達の髪は黒髪だが、実は染めている。染めていないと目立つし優太も百合香もこれ以上、人前で目立ちたく無いからだ。

本当の地毛は、銀髪だ。多分 隔世遺伝なんだろうな。瞳は、大きな灰色の瞳。これは何にも小細工もしない事にした。

仕方なさそうに立ち上がると優太は、自分の席から黒板まで歩いて行っていた。優太の頭の中では、この15年間の思い出が走馬灯のように蘇って来る。

無表情で淡々と数式を黒板に書いて、すぐに問題を解いた優太をレオンと呼んだ この数学教師持田綱吉は、パンパンと手を叩いて拍手して来た。

「さっすが、レオンだね。正解！」

俺は、自分の席に戻るついでにボソッとモッチーに言った。

「モッチー。レオンって呼ぶのだけは、ヤメ口って言っただろ」

キラリと光る銀縁のメガネをゆっくり上げながら、モッチーは「お互い様だろ？レオン。」そう言ってきた。

アイツ、絶対俺にケンカ売ってたんだよ。ったく！

優太は、チャイムが鳴ったと同時に大きく伸びをして、自分の席に座った。そんな俺の頭を軽く出席簿で叩いて来たモッチーは、笑顔で優太に「顔を貸せ」そう言って来た。

職員室に行くんだろうと思っていた優太は、モッチーの後を着いて行った。だが、優太の予想は外れてモッチーは、職員室を素通りして、小会議室へ連れて行った。

そこに座れと言わんばかりに顎で示すモッチー。

優太は、椅子にドカツと腰を下ろすと、モッチーが目の前に座るのを待った。

しんと静まる小会議室の中では、静寂と言う時間が過ぎて行く。ただ、時計の秒針を刻む音が、静かにそして規則正しく聞こえて来る。

「で？何が言いたい訳？また、百合香の事とかじゃねーだろうな」

痺れを切らした優太が、モッチーに問いかけると、モッチーはニヤリと笑っていた。

一枚の紙を俺の前に、スツと置いたモッチー。その紙は、進路予定表だ。俺達中三になると進路を決めて、それに向って別々の高校へと向って行かなければならない。だが、俺の予定表は、真っ白だ。

「どうして、書かないんだ？レオン？ お前だったら、何処でも軽く入れるだろ？何て言っただって、こないだの模試は、全国2位だったんだからな」

優太は、目眩を起こしそうなくらいに溜息をついた。進路進路進路って、今更 進路を決めてどうするんだよ。優太自身、気付いてい

なかったが、思わず心の声を独り言で呟いてしまった。

「高校とか、別に考えていない。俺は、百合香の影武者だしなー」

「百合香！あゝ懐かしいな。そういや、トオルは百合香と同じ学校にすると言っていたぞ。じゃあ、お前もそこにしといてやる」

いきなり決まった俺の進路。でも……百合香の学校って女子校じゃなかったっけ？俺にまた女装しろと言っても言うのか？

ジト目でモッチーの日に焼けた顔を見ると、モッチーは優太の頭を大きな手で撫でると髪の毛をくしゃくしゃにした。

「大丈夫だ。可愛い、甥っ子を女装させたりなんかしねーよ。んなことよりも、レオン、お前本当に知らないのか？」

そう、この持田綱吉は、俺の母さんの弟なのだ。俺の担任は中三まで全然変わらなかったのは、俺がモッチーの甥だと言う事なんだそう。良いのか？校長！

しかし、その女装を俺に無理矢理させたのは、モッチーあんだろ！そう、あれは、百合香が3年の時だった。俺のお守りをするのはもう嫌だと両親に泣きついた百合香に、母さんは自分の出身校である某お嬢様学校 聖ミシユカ女学院に入れる事にしたのだが……

百合香の今の成績じゃ難しいと判断したんだよな。それで、叔父でその時大学出たてのペーパーだったモッチーに、その学校の編入試験の事を聞いて来た。その時モッチーが出した結論は、俺に女装させて聖ミシユカ女学院の編入試験を受けさせる事だった。それまで長い銀髪に灰色の目をしていた俺は、確かにちよつと見ただけで女に間違われた事など、あるわけ……ある。

俺は、モッチーに半ば強制的に女装させられ、聖ミシユカ女学院の初等科に連れられて行った。筆記、運動、行動テスト共に満点を獲

得した俺は、文字通り優秀な成績で編入試験に合格する事が出来た。あの時に下着まで女物を履かされた恨みは忘れないぞ！しかも、女装姿まで写真に撮りやがって！思い出しただけでも、拳に力が入って来た。

「何を？」

優太は、クシャクシャにされた髪の毛を手櫛で整えると、詰め入りの胸ポケットに入れて置いた鏡で自分の髪をチェックしていた。黒髪の根元から、銀色が少しいたのであるが見えて来ている。

優太は、角度を変えて髪をチェックしていた。

（はー。また染めなきゃいけねーな。気分は、白髪染めだぜ）

「百合香の学校さー。来年度から、共学になるんだぜ。そうになるとアイツの事だ。学校に行かないとか言い出すんじゃないのか？」

優太は、持っていた鏡を机の上にポロツと落としてしまった。鏡は割れはしなかったが、コトンと軽い金属音が小会議室内に響いた。左手で前髪を掻き上げると、頬杖をついた優太は大きく溜息をついた。

あり得る・・・男嫌いの百合香なら、そう言う事を言う可能性は大ありだし、それに何も百合香の事を知らずに近づいて来る男達が危ない。百合香の得意技の足蹴りで顎の骨でも折られかねない。そんな物騒な想像をしていた優太の顔は青ざめていた。

しかし、ふと冷静に物事を考えれば、他の選択も出来る事に気がついた優太は、モッチーを見てニンマリと笑った。

「モッチー。そんなに百合香の事が心配なら、モッチーが百合香の学校に移れば良いんじゃない？だってさー、モッチー高校の数学教師の免許持っているっしょ？そうすりゃー、俺が行かなくても良

いんだけどな」

そんな俺の考えなんかお見通しだったのか、モッチーは、黒い瞳を輝かせて俺の尖った顎を人差し指と親指で掴むと迫って来た。優太は、まるで蛇に睨まれたカエルの状態となり、顔面蒼白になった。優太の目の前の数学教師、持田綱吉は、中学と言うか地元でも結構人気の教師で生徒達からのファンレター、そして父兄からの信頼と言う名のファンレターが殺到するくらいだ。

軽くウェーブがかかった黒髪、少し日焼けした肌に切れ長で黒い瞳。モッチーの意志を尊重するような形の良いキリリとした眉。笑顔が絶えないのは、本人もチャームポイントにしている白い歯だ。これで、落ちない女は居ないだろう。しかし本人は、ガーディアンとしてここに居る為に独身を貫いていると言っても、今年26才だ。

「優太。お前、俺がそう言う事を決めたら、ここの学校の生徒達から、狙われるのはお前だぞ」

一気に青ざめた俺は、ハッした。た、確かにそうだ。モッチーがバレンタインにチョコを貰うわけには行かないと女生徒達に言ったら、俺は彼女達に呼び出されて質問攻めにされ、挙げ句の果てに「モッチーにチョコを渡したいんだから、あんたが責任持って渡しなさいよ！」とそこまで言われたのだ。

あの地獄の思い出が蘇って来る……。優太は、がっくりと肩を落とすと力なく頷いた。

「分かった。行くよ。百合香と同じ所」

平和主義者の優太には、この悪魔の様な慧眼な叔父には、昔つから頭が上がらないのだ。モッチーに呼び出されないように、何とかして勉強もスポーツもそれなりに努力して来た優太。その努力が、

要らぬ方へ向いて来ているのだった。

優太に何とか、百合香と同じ系列の学校へ行かせる決意をさせたモッチーは、終始和やかな笑みを口元に讃えていた。

モッチーが、俺とトオルを推薦枠に入れてくれて、俺達は晴れて百合香と同じ高校へと行ける事になった。

中学の卒業式の日、優太は他の女子生徒達から呼び出され、ボタンと言うボタンを全て取られて行った。まるで盗賊にでもあったかの様に、ボロボロの制服姿となった優太は、自分の目の前に百合香の親友マリアが居た事に気がついた。

優太は、平然とそんなことをしていたが、本当はどうして皆が自分の学ランの金ボタンを塗り取って行くのかと言う事は、自ずと理解出来ていた。皆が心に思っているのは、俺ではなく百合香と言う彼女達の女神を慕って、少しでも百合香に近づきたい思いで俺のボタンを塗り取って行っただけのこと。マリアもその一人なんだろう。マリアからも、ボタンを下さいと言われていたのだが、ボタンは全てない。そこで、優太は苦笑いしながらも、マリアに自分の学ランを渡すとニツコリ微笑んだ。

「男臭いかもしれないが、これやるよ。」

マリアは、真っ赤な顔をしながらも、渡された優太の学ランをギョツと握っていた。

「たまに、百合香もそれ着てたんだ。」

俺の言葉に、驚いたような顔をしていたマリアを見て、俺はただ何処までも青い空を見上げていた。

その日は、俺の右には百合香そして左にはマリアがいた。他の人から見ると両手に花なんだろうが、俺に取っては暑苦しくてどうせな

ら、女2人で仲良く歩いて行って欲しいと思っていた。其処へ、叔父のモッチーもやって来て、この日は、マリアと別れた後でモッチーの家に行って宴会と言う名の打ち上げがあった。

龍の娘の血

怒濤の卒業式も終わった次の日から、春休みとなる。

俺と百合香は、ピアノ教室へ行くバスに乗る為に走って家を出た。その時、トオルもたまたま通りかかって、着いて来る事になった。何処をどう調べたのか知らないが、百合香がどうやらこのバスに乗って隣のピアノ教室に行っていると言う事を突き止めた暇人がいたらしい。バス停には、男子学生の列。それを見た百合香の足が竦んで、バスには遅れてしまった。不安そうな百合香の顔を見て、俺は携帯を取り出すとすぐにこれから行くピアノ教室に電話をかけていた。

「少し遅れそうなので、待っている人を先にお願ひします。」

百合香曰く、「ピアノ講師もみんな優太の事を一番に可愛がっている」と言っていた。

果たして、そうだろうか。期待されているから頑張るだけで、それに答えられなかったら、どうしようと俺はいつも悩んでいるんだが。そんな俺の気持ちなんて百合香には、分からないんだろうな……きつと。

百合香の男嫌いは、俺達がピアノ教室に通い始めた頃にまで遡る。あれは、5才の春。丁度 今日と同じようにバスに乗ってピアノ教室に通っていた、あの頃。俺達は母親とバス停ではぐれてしまったのだ。当時の俺達双児の髪は銀髪。特徴のある髪にも関わらず、俺達は行方不明となった。

あの時、バス停で俺と百合香の手を引っ張り、連れ去った男は、深紅の双眼をしていた。ニヤリと笑うと俺の長い髪を掴んだ。俺達は、その赤い双眸を持った男と三日間過ごす事になったのだが、俺達に

指を触れる事はなく、ただ俺の血を欲しがっていた。百合香は、自分の目の前で弟である俺の手首にナイフが充てられるのを見て、ガクガク震えていた。俺はただその男の赤い双眸をじっと睨んでいた。俺の手首の上を踊るようにナイフが走った。痺れるような痛みと赤い俺の血がゆっくり流れて行く。

苦痛に歪む俺の表情を見て、男は気味悪い薄ら笑いを浮かべていた。俺の血を不思議な蒼い小瓶に入れると満足げに笑っていた。

「龍の娘の血。しかと貰ったぞ。」

そう男は言っと、霞のごとく消えて行っただ。俺達が駆けつけた警察官達に発見されたのは、俺達が攫われてから5日後のことだった。俺は、左手首に傷を負い、百合香は宙を見つめて震えていたと言う。俺は覚えていないが、百合香は女性警官が来るまでの間、ずっとその場所から離れなかったと言う事を後で俺は、知った。この誘拐事件以来、百合香は男を極端に嫌うようになった。ただ違うのは、トオルの事だけは昔から見知っているので、アイツだけは百合香にとっても特別な存在のようだった。

俺達は、近道をする為に普段は滅多に通らない空き地を抜けて行っただ。春だと言うのに、この所の晴天のせいかな、植物が枯れて来ていた。俺は帽子を取ると、すっかり銀髪に戻った髪を風に靡かせた。百合香の腰まで届く長い黒髪は、この所 全く染めてないので、こちらにも銀髪に戻って来ている。枝に髪の毛が引っかかりそうだったから、優太が百合香の肩を掴むと髪を帽子の中に入れてやった。

「ありがとう。優太。」

トオルは、百合香に手を差し出すと百合香は少しハニカんだように

して、トオルの手を握り返そうとした時、自分達の足下に不思議なボックスが落ちているのを見つけた。

トオルの近くには青いボックスで金の模様が刻んであった。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであった。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであった。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振って来た。

「ボックス．．反応アリ」

三人の足下が光ったかと思うと、いきなり俺達は時空の歪みに引きずり込まれて行った。

優太の憂鬱？

一瞬、世界が真っ白の光の粒で覆われた様に見えた。

俺は起き上がると、自分の髪が長いことに気がついた。

平たい胸を探すために、ペタペタと両手で胸を触るとプニョという
ような柔らかい感触。

そ、そう言えば、さっきから足元がスースーする様な気が……

お、俺が百合香になっている？

周りを見渡すと、百合香もトオルも居ない。

これはもう、悪い冗談なんだろうと思っていると、目眩がして来た。

暗闇の中でざわざわとした声が聞こえて来る。

五月蠅いな……人が眠っている時に、何をもめているのだろう……

目をゆっくりと覚ますと、ドアップで男の顔が俺に近づいて来ていた。

「キャー！誰なの！痴漢！」

俺は驚いて目の前の男の横っ面を平手で張り倒した。

パチンと言う様な軽い音に、目の前の男は俺に叩かれた左頬を赤く
していた。

一瞬、その場の空気が止まった。

「ぶ、無礼者！アレキサンドルフ様になんと言う事を！！」

俺がとっさに取った行動を見て、目の前の男は驚いた様な顔をして
いたが、クスツと笑うと「気に入ったぞ。」そう一言だけ残すと

白銀のマントを翻して、俺の目の前から一瞬で姿を消した。自分の周りを見渡すと、ヘンテコナ服を来た奴らばかりだ。服装だって百合香が良く読む中世の騎士とのLOVEロマンスの本の挿絵にある人物が着ているような服だ。よくコントとかで、ド派手な力ボチャパンツの下に白いタイツを履いた足ってあるよな……。まさに、あれだ。

俺の好みとしては、やはりギリシャ神話に出てくる様な神々の服装の方がシンプルで良いけどな。

現実逃避みたく、そんな事を考えていたら、ヒヤリと冷たい物が俺の喉元に当たった。射るような殺気を帯びた視線を周りに感じた俺は、じっと銅像の様に微動だにせず、周りの出方を待った。

俺の前に金の色竜の仮面を着けた男が現れると、そいつの手の中には、ボックスがあつた。

確か、あの時 俺達は三つのボックスを拾ったんだつた。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであつた。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであつた。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振つて来た。

目の前の男が持っているボックスは、俺が手にしていた物とは違っていた。金のボックスで朱と銀の模様が入っているのを俺の前に突き出すと男は、無表情で俺に言つて来た。

「これは、お前のボックスか？」

俺の返答次第で、この俺の目の前にいる男は、左手にいつでも剣が取れる様に手を添えていた。

ちよー待て！

これって俺が正直に答えれば良いのか？
それとも含みを持たせた方が良いのか？

悩みながらも、俺は男の目を見た。

切られるかもしれない。

だが、これも俺の人生かも．．．。

さらば、俺の人生。

そう思ったおれは、ゆっくりと口を開いた。

優太の憂鬱？ 名前

金のボックスで朱と銀の模様が入っているのを俺の前に突き出すと男は、無表情で俺に言つて来た。

「これは、お前のボックスか？」

「分からない。」

男が聴いて来た事に短く答えると男の眉が、ピクピクと動いていた。や、やべー俺もしかしてこのオッサンを怒らせたのかも知れねーな。仮面を付けた男は、「そうか」と一言答えると俺にボックスを手渡した。周りの人達が輪になって俺の事を見ていた。どうやら、それは俺にこのボックスを開けてみると言わんばかりの雰囲気だった。

俺は仮面の男から受け取ったボックスを手のひらに乗せていた。

1〜2分待ったが何も起こらなかった。

ムツとした顔になった俺。

別に何も変化はない。箱に継ぎ目も何も無いから普通に開ける事も出来ないな……。

そう思っていた時に俺の頭の中に響いた音楽があった。それは第九だった。

俺は、口の端を少し上げて器用に微笑むと箱を人差し指で軽くリズムを取るようにトントントンと叩いた。

第九のサビのところだけ鼻歌を歌いながら、人差し指でボックスの横を叩居てみた。すると手の上にあるボックスが、いきなり右へ左へと揺れ出して来た。周りの人達のざわめきも凄かったが、俺は一体この中に何が入っているのだろつかと興味が湧いて来た。ボックスから出て来たのは、小さな龍だった。

深紅の瞳をした銀の龍は、俺の事を見ると俺の心に話しかけて来た。

（私を呼び出したのは、お前か。ほう、懐かしいな。龍の娘の血を引く人間がいるとはな．．．。）

どこからか聞こえて来るのか分からない声に驚いた俺は、辺りを見渡していた。広いとはいいがたいと言うか、暗くて部屋の隅々まで見えない。一体何故、またあの忌まわしい記憶を蘇らせるような事を言っただ？！「龍の娘の血」封じ込めた幼い頃の忌まわしい記憶。赤い双眸をしたあの男の事を思い出してしまふ。心の傷の苦痛に歪む俺の表情を目の前の龍は、物珍しそうに黙って見ていた。

そんな俺に溜息まじりの龍の声が聞こえて来る。

（この私の声は、お前にしか聞こえて来ない。そうだ。私が話しているのは、お前なのだぞ）

目の前の龍にそう言われて、俺は面白いな．．．まるでゲームの世界だ。賢者の石みたいだな。そう思っていると龍の声は呆れたように俺に話しかけて来た。

（お前は何者だ？ 本当にお前が私を呼び出したのか？）

周りには、俺が龍とガチでニラメッコしているように見えていたんだろうな。俺は、声に出さなくて良いのなら．．．と思って龍に心で自分の名前を告げた。

（俺の名は優太レオンハルト＝ホワイトウィングナーだよ。何故か知らないけど、姉の百合香と体が入れ替わったみたいなんだ。で、気がついたら此処にいたんだよ。君は？）

（そうだな、お前の好きなように名を付けていいぞ。俺はお前が口ずさんでいた曲が気に入った。）

手乗りの小さな龍に高飛車に言われて、俺はうんと唸るとそうだなと悩んだ挙げ句、第九の英語名であるJoyに決めた。

（ジョイはどう？あの曲は喜びの歌だし。君が好きならジョイにしよう！）

名前が決まった途端、龍は、俺の手から消えて俺の目の前に人の姿として現れた。

それは、俺が望んでいた服装・・・ギリシャ神話に出て来るアプロディーテの様な白い神々しい布を纏っていた。

肩に着くか着かないか位に揃えられた真っ黒な髪、俺と同じ灰色の瞳は、光の加減で金にも銀にも見え、雪のように白い肌に映えるような赤い唇は、整った顔を更に神秘的に見せていた。

それを見た周りの人達は「おお！！召還、成功でございます」そう口々に叫んでいた。

「ジョイ。気分はどう？君の分かる範囲で良いから僕と百合香がどうして入れ替わったのか教えて欲しい」

俺は、ジョイにそう訪ねるとジョイは、ゆっくりと優雅に俺の前に跪き、俺の目を見てこう言った。

「それは、あなた様と百合香と言われる方が、自分達の魂が入れ替わる事を望まれたからでございます。そして、それは龍の血を持つ娘が現れたと言う予言が、当たったと言う事です」

ジョイに言われて、確かに俺は自分でも一度で良いから百合香のように、自分の思うままに行動してみたいと思っていた。

俺達は双児でも、やはり性格は180度違う。百合香は、やはりいつも自由奔放で、好き嫌いが激しい性格だが、彼女の最大の武器はやはりあの天使のような笑顔がキラキラと光っている事だろう。

俺は、いつもそんな皆の注目の的だった百合香に憧れていた。

何をするにしても、百合香はいつも人の目を惹いていた。俺は、百合香と同じ容貌でも、大人しいし従順と言うか、平和主義者だ。

下手な争いは好まないし、だからと言っていつも言いなりになっている訳でもない。やる事はやって、言う事は言う。

ただし控えめにだ。

相手を傷つけないように。 もしかして、百合香はそんな俺になりたかったのか？

いや．．！ ちょっと待て、確かこのジョイは、予言が現実になったって言うていたな．．．。それも、龍の血を持つ娘が現れるって言う予言があったのか？！

そんな風に考えているとお腹が急に痛くなってきた。

何なんだ？この痛み！痛みで顔を曇らせると、周りに居た人達は大騒ぎで「誰か！医師を！」そう叫んでいた。

そんな中、ジョイだけが冷静に俺を見ていた。

「力を使い過ぎたんだろう。自分が名乗る名前は決めているのか？」

な、なまえ？そんなん決まってるだろ？！ 俺は優太なんだから

！ そう思って自分の名前を口にしようとした俺に、ジョイは微笑みながら言うて来た。

「魂と肉体が決めた名前を言わなければ、あなたは死を望む程の痛みをその身に受ける事になる。」

それって、間違えたら俺は死を願うくらいの痛みに襲われるって訳？
どうする？

優太の憂鬱？ 名前

ゴクつと生唾を飲んだ俺は、じつと考えた末にどうやったら痛い思いを見ずに済むのかと言う事を考え始めた。

所謂、消去法だ。俺の考えでは、俺の魂は百合香の体に入って百合香の体には俺が入っているのだろう。

なら、百合香と名乗れば良いのだろうが、俺自身 百合香とは名乗りたくも無い。

15年間あれだけやられて来たんだ。

ん？聞きたいか？ ならば、聞かせて信ぜよう。

百合香ってヤツはな．．．．．いつも良いところ取りで、褒められ、チャホヤされるのはいつも百合香だ。

だから、死んでも百合香とは名乗りたく無い。

と言うか屈したくは無い。

あの天使の笑顔の悪魔には！ なら、百合香が嫌っていたあの名前ならどうだろう．．．．。

ペトルーシカかナターリアを^{もじ}擦ってナターシャとか。

死んだ婆さんは、俺の事を特に可愛がってくれていたな．．．。毎日、俺の銀髪の髪を撫でながら、本当は俺にペトルーシカと付けたかったんだと言っていた。

あの婆さんは、俺に「こんな小さなお前に世界を救う責任を負わせるなんて、神様もなんて酷い運命をお前に押し付けたんだろっね」と言っていたな．．．。

俺は、その時迄 婆さんが何を言っているのか知らなかったし、婆さんの言っていた言葉の意味も分からなかった。

ただ、思っていたのは、百合香と言う双児の姉を持った俺を不憫に思っていた事なんだろうと確信していた。

悩みながらも俺は、小さな声で自分の名前を呟いた。

鋭い爪で、心臓を鷲掴みされたような鋭い痛みが、優太を襲った。

「お、俺の名前なのに．．．」

膝をがくんと着くと、脂汗が額ににじみ出て来た。

俺は鋭い刃物で心臓を抉られたような痛みが、急に襲った胸を拳で押さえると、鈍痛な痛みに止りがちだった呼吸を整える様に、ゆっくりと息を吸い込んだ。

胸の痛みが治まった頃、また別の名前を呟いた。

「ペトルーシユカ」

今度は、剣山で心臓を潰されそうな苦痛が俺を襲った。余りの胸の痛みに立っていらなくなり、とうとう俺は座り込んでいた。

百合香の名前もダメだったか．．．。

名前に殺されるなんて．．．そんな馬鹿な事があって良いのか？

よく、婆さんが言っていたな。

名は体を表すって．．．。

「優太の本当の名は、世紀末と恐れられ人類を闇の恐怖へと落とし、てしまった我が儂な人間達にとって、最後の希望の光となるんだよ。それがお前に与えられた使命。」

小さい俺は、婆さんが言っている意味なんて、分からなかったが、俺にとってもとても大事な事を言っているのだらうと、幼心にも婆さんの皺くちなな手を握り、目を輝かせて婆さんの話を聞いていた。ユラユラとロッキングチェアーに、体を凭れさせると、小さな俺を抱き締めながら言っていた。

「人々はお前に平伏すじやろう。平和を願うお前を天使か神と呼んで。どんなにお前がその名を嫌がっても、それはお前の血が．．．」

この銀の髪と瞳が覚えているんじゃ。名に殺される前に、自分の使命を思い出すんじゃ。」

薄れ行く意識の中で、俺は最後の望みをかけて、名前を呟いた。もし、またこれも体と魂に拒否されれば、俺はもう死ぬかもしれない……。

「ホープ エンジェル」

俺の言葉が文字となって空間に浮かぶと、クルクルと俺の周りを回り出して眩い金色の光を放つと、光は粒子に変わって俺の頭からつま先まで万遍なく降り注いだ。ジョイはその光景を目を細めて見ていた。

「あの時と同じだな。ホープ」

ジョイは、形の良い唇の両端を少し上げて微笑むと、意識を手放して石畳の床に倒れているホープを見ていた。

優太の憂鬱？ 正しい起こし方

さわさわと俺の髪が、風に弄ばれているようだ。

さつきまで、俺は自分に新たな名前を付ける為に文字通り死ぬような苦しみをこの身に受けた。

ジョイが言っていたように、もし俺の名前が魂と体に受け付けなければ、死ぬと言われたが、本当に死ぬかと思った。

「きろ．．．．」

誰だ．．．？

母さん達は、海外に居るから、この声は違うよな．．．この声は母さんよりも少しだけ低い声みたいだ。まるで百合香みたいだな。

「ごめん．．．。百合香．．．今朝の食事当番って俺だったよな．．
．今作るから．．」

寝ぼけ眼で、ベッドから降りると台所へ向う為に使う階段に向う俺。

いきなり、俺は顔面を石造りの壁に激突させていた。
あまりの痛さに、俺はしゃがみ込んで唸っていると、「まだ寝ぼけているのか？」呆れ顔で俺を見ているジョイが居た。

「此处．．．。ああ、未だ夢の世界だったんだな。じゃあ、また眠るからお休み」

俺がまた眠りの森の住人になろうとしていた時に、ジョイが「お前の名前は何だっけ？」そう言って来た。

俺は、眠気眼で自分が日本に居た頃に使っていた名前を言ってしまう

った。

『名前？何寝ぼけてんだよ』

寝返りを打つ俺の髪を指で梳かしてくれてるが、風呂にもシャワーにも入っていないから、纏れてんだよな……。クイクイとたまに髪を引っ張られる感じが心地良い。

俺って、もしかしてM？って思う程、あまりの気持ち良さに眠りに着きそうになった。

そんな俺にジェイはもう一度聞いて来た。

「お前の名は？」

「うん。優太だ。よ！！　　ウ！！！！　い、痛い！！」

心臓をデカイ鈍器で殴られたような痛みが、俺の体に走った。もし、これがただの痛みではなくて、本当にこんな事を実際にやられていたら、俺は何度死んでいるんだろうか？

胸を押さえながら、のたうち回っていた俺。

「あ。俺の名前に殺される……。」

あまりの痛さに俺はベッドから転げ落ちると、七転八倒していた。薄らと目を開けると、黒髪に灰色の瞳をした美形の女が俺の目の前で仁王立ちしていた。

普通、女が仁王立ちするのって、ダンナとか彼氏に浮気されたときなんだよな……。俺は、浮気なんてしないし、それに彼女なんて居ないから、こんな美人に仁王立ちされる覚えはないんだけどな。。。

大きく伸びをした俺は、きよろきよろと周りを見渡すとまだ外は薄

暗かった。一体何時に俺を起こしたんだよ！

むっとした顔でジョイを睨むとジョイは、寝ぼけるお前が悪いと言
って来た。

窓の外は、不思議な景色が広がっていた。

優太の憂鬱？ 異世界の朝 一日目

異世界に居る事は、分かっていたけど此処まで違うとは思わなかったのだ。

「すっげー。月が二つ出ているよ。ジョイ！これって普通なの？」

まるで双児のように月が上下に並んで出ていた。月自体、日本で見た月と変わらなさそうだが、銀色の月と金色の月がまだ暗い夜空にぼつかりと浮かんでいる。

風が、まるで銀の蜘蛛の糸の様に風の流れが見える……。幻想的な世界だ。その風の糸も、目を凝らしてみると、小さな小さな龍の妖精達が、これまたチビチビとした可愛い銀色の羽を広げて飛んでいるのだ。

もしかして、地上でよくダイヤモンドダストが発生すると、巨大な樹木でも倒してしまうって言うのは、こいつら……風の精達の事を言っているのか？

手を窓から出すと龍の妖精達が、俺の手に纏わりついて来る。俺の手の上に乗った彼らは、俺に対して頭を垂れ、そして小さな銀の羽を広げてお辞儀をしている。

俺は、それを見てにつこりと微笑むと彼らは、銀色の顔に薄らと紅を差したように顔を赤くした。それがまた綺麗だ。

彼らをまた、空へと放つと小さな羽を懸命に動かしながら、右へ左へとヨタヨタと飛んで行く。いつの間にか小さな竜の妖精達は、銀の蜘蛛の糸の様な風の流れにやがて変わって行った。

男の俺でさえもうつとりして来た。

男……？　そーいや、俺の体って……。百合香の体なんだけど……。風呂とかどうするんだ？

そんな事を考えていると、ジョイが咳払いをし始めた。
どうやら、俺に何か言いたそうだった。

俺は、ジョイの方を見ると、にっこり微笑んだ。これぞ百合香の得意の天使の微笑みだ！

ま、俺は百合香じゃないから、どんな笑顔になっているかは、分からんがな。

ジョイは、俺の笑顔を見ると固まっていた。

え……。結構、笑顔には自信があつたのにな……。一人でシヨックに打ち拉がれていると、ジョイは肩を震わせて笑っていた。

「お前つて、面白いヤツだな。龍の血を持つ娘つて聞いていたから、もう少しツンケンしたヤツかと思っていたが、これなら楽しめそうだな。ホープこれに早く着替えるんだ。もうすぐ始まるぞ」

はい？ 楽しめる？ ツンケン…。？ それつて、もしかして百合香の事じゃないのか？

そんな事を考えながら着替えをしていた俺は、はっと気がついた。

「この衣装つて、司祭の衣装みたいじゃないか！ 何でなんだ？ 俺のGパンは？ Tシャツは？」

辺りをキョロキョロして自分の洋服を探していると、ジョイが俺の手を引いて部屋の外に出た。

何も答えてくれないジェイは、俺でもうつとりするような灰色の瞳で俺に流し目を寄越して来た。そっぴや、ジェイの性別つて何だろうな。

男か？ それとも女か？

今、後からそれを確認すれば、きっと俺はこいつから蹴りを入れられそうだな……。

俺は、考え事をしながら歩いていると急に辺りが寒く感じた。

あまりの寒さに、思わず身震いをした俺は、上を見上げた。

だってさ、寒いって言うのは吹き抜け天井がある所だしな、どれだけ吹き抜けてるのか見てみたいと思ったんだよ。

でも、それを見た時　俺は自分の知識に寄って蹴りを入れられた気分になった。

まるで東京ドームのようなただっ広い円形の間は、壁も床もそして延々と続く螺旋階段さえも、全て石造りなのだ。

その螺旋階段が終わりを告げる先と思いいし場所は、一筋の光が見えて来る。あの場所らしい。

まさか、コイツは俺にこれを上れなんて言わないよな．．．。

この高さって、東京タワーよりも高いじゃねーかよ！確か東京タワーの高さは333メートルだったよな．．．．。石段の一つの大きさが大体30？の高さとして、一周回っているこの螺旋階段の段の数が、50段。それがざっと数えて200周以上ある．．．．。か、考えたく無い．．．．。

婆さん．．．。俺やつぱ帰りてーよ。平和な日々に。例えモチーにイジラレても良いから、帰りたいよ平和なあの日に．．．。

俺の目から不安と言う涙が溢れる。

優太の憂鬱？ 使命

石畳の廊下を歩いて行くと、石造りの螺旋階段を上って行った。どこまでも続く螺旋階段を息切れしながら、俺は恨めしそうに見ていた。

一周ぐるりと回るこの螺旋階段を上るだけで、東京タワーと同じ高さなんだと思うと、足が竦んで来る。

ここから、落ちたら俺は．．．死ぬ。

それも確実にだ。

まだ朝食も食べていないのに、こんな激しい運動をさせるのかよ．．．。

俺の前を歩いているジョイは、息切れ一つ起こしていない。一体どんな体の作りをしているんだ？と不思議に思っただけでジョイの足下を見てみれば、浮いている．．．。

「えー！！！！何で？ どうして、ジョイは浮いてんの？！」

思わず俺の高い声が螺旋階段のホールに木霊している。ジョイは、俺の驚いた顔を見ると黒髪を少し乱れさせた白い顔から、金色の双眸が俺を捕えた。

反対に溜息まじりで呆れ顔を見せると俺に言っただけ。

「お前も、自分の力を使えば浮遊出来るんだ。やろうと思わなかったヤツが悪い」

ジョイにそう言われると俺は目を瞑ってロケットの発射台をイメージした。頭の中で発射までのカウントダウンが始まった。（10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、発射！）俺の足下から大量の水蒸気がモクモクと上がった。そして次の瞬間、俺の体は矢より

も早く光と同じ早さで、このホールの最上階へと飛んで行った。次の瞬間、俺は勢い余って塔の最上階の壁を壊した。

俺の様子をただ黙って観察していたジョイは、次の瞬間驚きと共に今度は、彼の声がホール内を木霊して行く。

「嘘だろ!？」

俺は、美形のジョイの驚く顔を見れて本当に嬉しかった。それと同じに俺の目の前に居る天使のような羽を付けた人が立っていた。

その人の羽は、虹色に輝いていた。男なのか女なのか分からないが、まるでギリシャ彫刻のように整った彫りの深い顔立ち、そしてしなやかそうな手足には、最低限の筋肉がついていた。

俺は、ついその人の胸に両手をぴとと当てると「本物?」そう呟いた。

ジョイが俺に追いついたのは、俺がその人の胸に手を当てている所だった。

その時のジョイの表情は真っ青から真っ赤に変わって行った。

(ジョイの顔色って、カメレオンみたいに変わるんだな)

そんな俺の思考を読んでか、ジョイは、俺に「お、お前、神様に何て事をするんだ!」そう言っただけ俺の手を神様と呼ばれる人の胸から離れた。

「え?だって、男か女か分からなかったから、だってさ!股とか触ったら悪いだろ?んなら、胸の方がまだ良いんじゃないの?」

そう言っただけ俺の頭を後から、手でペシッと叩いて来るジョイ。ジョイってば、何だか関西芸人みたいだな。。。あのドツキ漫才夫婦の様な感じだ。。。

コイツにハリセンを持たせたら、右に出るヤツは居ないかも知れないな．．．。

神様と呼ばれた人は、そんな俺達の事をずっと微笑みながら見ていた。

「良いですよ。ホープにも考えがあつての事でしたからね。どうですか、性別が分かつて満足しましたか？」

俺は、コクコクと頷くと神様って両性だと思ったんだけど、女だったんだ．．。知らなかった。

まじまじと俺は自分の手のひらを見つめるとフニフニとさっきの感触を思い出させるように手を動かし始めた。

そんな俺の行動なんて分かっていますよとばかりに、ジョイが俺の手を掴むと神様にこれからの俺の身の振り方を聞いて来た。

この異世界で、この神様は俺に何を求めているんだろう．．．。

俺は、この神様の希望を叶えてやることなんて出来るのかな．．．。

不安になりながらも、俺の隣で俺の手を掴んでいるジェイの横顔を見ていた。

浮遊していた時は、金色だった瞳も今は、灰色に戻っている。

どうやら、瞳の色は、力を使う時に変わるらしいな．．．。

「ホープエンジェルよ。お前に使命を与えよう」

神様の優しい声が空に響き渡る。俺の使命とは、何だ？！

優太の憂鬱？ 使命（後書き）

お調子者のホープ（優太）です。

優太の憂鬱？ 第二日目（改）

俺は、自分の為に用意された部屋に戻るとゴロリと横になった。

元は男なので、ドレスの裾が太腿まで捲れ上がっても何とも思わなかった。

目を瞑り溜息をついた。

早く朝になれと。

夜明けと共に俺とジェイはこの奇妙な神殿から旅立つ事になった。

俺の頭の中では、昨日神様に言われた事、そして教えられた事がグルグルと回っている。

そんな俺の思考を読んでいるのか、ジェイは、「気にするな。お前の所為ではない。お前の血が齎した事だ」と俺を慰めているのか、それともケンカを売っているのか分からない事を言ってきた。

昨日、俺は神様に言われた。それは普通では信じられない話だった。

神様の話に寄ると、俺はガーディアンである百合香とそしてトオルに会わなければいけないらしい。そして国々にいる他のガーディアンと接触しなければならぬそうだ。

そして、まず2人に会えたらエルドラードと言う国に行くようにと言われた。エルドラードと隣接する国エルドラレッドと言う国の間には死の谷があると神様が話してくれた。

そこには、龍の血を喉から手が出るほど欲しがっている奴らがウヨウヨいると言う事も言われた。神様から、俺への忠告は決して、甘やかしたような優しい物では無かった。

「もし、君の銀髪で銀の瞳が他の人達に見られたら、すぐに君は捕われて、血を抜き取られちゃうよ。君の血は、一滴でも彼らに取っ

ては一生分の給料となるくらい、貴重な物だからね。だからと言って、誰彼構わずに、自分の血を人に上げる事は出来ない」

神様は、俺の心を読んでいる！？

俺が、人助けをするんだから、少しいや、一滴くらいの俺の血をその貧しい人達に上げれば、喜ぶんじやないのかなんて思っちまったから・・・。

神様の優しく大きな手が、俺の銀髪を撫でている。

「ホープは、優しい子だね。だけど、君の優しさはたまに人を傷つけてしまう時があるんだよ。その人がそれを望んでいない時もあるからね。それに、君の血は平和を望む者には、平和を与えるが、破壊を求める者には、世界の破壊を与えてしまうんだよ。それが例え立派な神官だとしても、彼らに一欠片ひとかけらの欲望があれば、君の血はその欲望を増殖させ、世界を破滅に追いやるんだよ。君の血が一度盗まれた時に、君の世界で何が起こったか知っている？」

ホープと呼ばれた時に俺は、自分の両肩をピクンと震わせた。もう、僕は優太として両親や友人達そして百合香からも呼ばれる事はないのか？そう考えたら、悲しくなってきた。

ようやく、百合香を守る為に同じ高校に入れたのにさ・・・。何でこんな所に飛ばされなきゃなんねーんだよ。

そんな事を考えていた時に、神様は俺と百合香が幼い頃 誘拐され、俺の血が深紅の双眸をした男によって盗まれた時の事を話始めた。そっぴや、あの後って一体世界で何が起こったんだろうな。百合香はあれ以来、男嫌いにはなるし、俺の事を邪見にするようになったから何かあったに違いない。

俺は、知らないと神様に頭を振ると神様は俺を泉の前に連れて行った。

「覗いてご覧。あの時の事が見えて来る筈だよ」

泉が濁っていて見えねーよ。目をゴシゴシと擦っているとフッフと神様に笑われた。

「濁っているのは、泉ではなく君の心です。真実を見るのを怖がっている君のね」

神様の指が泉に触れると泉の水面が波紋を起こし始めた。うねうねと景色が揺れる水面と共に見えて来る。

あれは、5才の春のあの日。深紅の双眸をした男に連れ去られた俺達を小屋に入れて、初めに百合香に手をかけようとしていた。百合香の髪を触った途端、百合香の髪が銀髪から金茶毛に変わると男は舌打をして「チツ！ガーディアンか。」憎たらしそうに百合香の方を見て言っていた。

今度は俺に近寄り、俺の銀髪を触ると何も変化がないのを見てニヤリと笑った男は、子供の俺の細い腕を掴むと呪文を唱えてナイフを俺の手首の上で踊らせるようにしていた。俺の血を蒼い小瓶に入れると男は消えた。

その後、泉の景色は他の国の景色となった。俺を誘拐して血を採った男が其処に立っていた。

立っていたと言うよりも、浮かんでいたのだ。男は俺の血を一滴空から垂らすと、その国は、一瞬で炎に包まれてしまった。

男はそれだけじゃ物足りなかったのだろう。俺の血から兵器を生み出すと次々と最新鋭の爆弾が製造されて行った。

男は狂ったように笑いながら、「これさえあれば、俺様はこの地上の……いや全宇宙の支配者に成れるだろう」男の姿は霞の如く消えた。

俺は、後にいる神様を振り返ってみて見ると神様は複雑な表情を

していた。

どうやら、あの霞の如く消えて行つた男は、この世界の人間らしい。そして泉が光るとこの世界での戦争を映し出した。

自分の欲望に飲まれ行つた深紅の双眸をした男は、7つの大国を自分の手中に手に入れる為に、大国の王達に無理難題を吹っかけて来た。

男はカシュミール、パハスカ、エルドラード、エルドラレッド、フォルサム、パスカール、ジルギスにそれぞれの第一王女を自分に差し出すようにと言つて来た。

カシュミール以外の国からは、第一王女の替え玉を差し出していた。男はそれに気付く事なく7人の王国から人質という最高の妻達を娶つたと言つ優越感からか、酒を姫達に注がせた。

カシュミールの第一王女であるミシユカは、男が完全に酔っぱらうと眠つた頃を見計らつて龍の血が入つた小瓶を男の懷から盗むとそれを床に叩き付け破壊した。

床に零された龍の血は、赤い煙と共に現れた銀色の巨大な竜が空中に出現した。そしてミシユカを見下ろすと「お前の望みは何だ？」そう聞いて来た。どうやら、このミシユカ姫には欲望も何も無かつたようだ。

彼女は、「この男に永遠の罰をそして、この世界に平和を下さい」そう言つと銀の巨大な竜は大空高く舞い上がると建物の中で、いつの間にか目覚めていた男に向つて落ちて来た。竜は、男を口に銜えると地の底に消えて行つた。

空一面に覆っていた暗雲も、いつの間にか晴れてきた。ミシユカ姫が空を見上げると青空には大きな七色の虹がかつていた。その虹の中から先ほどの竜が現れるとミシユカ姫に予言を告げた。

「いつの日か、竜の血を持つ娘が此処に現れる。その時に世界はまた困難に陥るだろう」

「その者はどうして、この世界に来るのですか？何故？」

竜は答えなかった。

「そなたに7つのボックスを授けよう。それぞれに役割がある。7つの国に名前があるようにな」そう言うと竜は消えて行った。

「どうやって、その娘を捜すのですか？！」

ミ「月の光をその身に纏ったように、流れるような長い銀の髪をし、平和を願うミシユカ姫・・・其方のような銀の双眸を持つておる。その者が現れし時は、この世界が破滅へと向っている時じゃ」
シユカの問いに竜は、稲妻のように空に声を響かせると、虹の中へ消えて行った。

ミシユカ姫に連れられて、それぞれの国から連れて来られた7人の人質達は、自分達の国へと帰って行った。

ホープは、肩を震わせながら自分が此処へ連れて来られた意味を知ると、神様の服にしがみついて泣き出した。争う事が嫌いで、どんな面倒な事にも時間をかけて分かり合おうとして来た自分の存在が、人を世界を狂わす事になるなんて・・・。

ホープの両肩を持った神様は微笑みながら、ホープの両頬を両手で軽く挟みながら持ち上げると、まだホープの銀の双眸からポロポロと零れ落ちて来る涙を拭ってやった。

「ミシユカ姫の時代からもう、2000年の時が過ぎたんだよ。今のこの世界は、彼女が望んでいた平和からかけ離れ、7つの大国は、内戦、混乱が起き、戦争が始まったんだよ。もうこの世界の終わりに近づいて来たんだ。それを知らせる為にホープ、君をこの世界に呼んだんだ。もし、君が自分の眼で見てまだこの世界も捨てた物で

はないと確信した時、君の力である血を使いなさい。もしも、その反対であっても使うのは君の血だよ。全ては君の心次第なんだ。その為に私の力を示した竜ージョイを君に使わせた。さあ、世界をその目で見て来なさい」

でも俺はその時まで知らなかったんだ。

俺の血を使った戦争が、他にもあった事など。神様は俺が傷つき、俺がこの役目を放棄するかもしれないと思ったらしく、俺にはもう一つの残酷な映像を見せなかったのだ。

そんな事は、俺は露も知らず、神様の顔を見た。

「では、行って参ります」

優太の憂鬱？ 第二日目 (改) (後書き)

少しだけ付け加えたり、直したりしました。

優太の憂鬱？

神様の言葉に驚きながらも、白い眩い光はホープとジョイを優しく包み込んで行った。

輝く巨大なシャボン玉の中に2人は入れられ、ゆっくり地上へと下ろされた。

ホープは、自分の長い銀の髪を束ねると頭巾の中に隠した。瞳はジョイに頼んで蒼い双眸に変えてもらった。

ジョイが言うには、「ホープ。自分の力を使う時にだけ、其方の瞳の色は変わるから、気をつけろ」そう言うと俺の目を伏せさせた。瞼にゆっくりと触れられるジョイの温かい唇の感触に、俺は少しドキドキした。

俺はふと気がついた。何で俺って女なんだよ。別に男でも良いじゃんか！

そう思っていたら、ジョイからこの世界に伝わる昔話を聞かされた。

遙か昔、人は神になろうとして禁断の罪を犯した。

その時代には、人間は沢山居たが、皆それぞれの役割を持って生きておった。

そんな平和な時代に、人は初めて禁句を犯してしまう。

禁句―それは、禁断の果実と呼ばれる「龍の実」を食べてしまった女から始まる。

女は、美しく賢く誰からも好かれる人間であつた。

その時代の神と言われるトステーベ神にとても愛された女であつた。女は月の光をその頭上に纏わせたような、長く艶やかに光る白銀の髪をしていた。その不思議な髪と同じ色であつた瞳は、銀色であつた。

その頃の人間達は黒髪、黒目の者や、茶髪に茶目、または緑の目、

金色翠目や青目の者が殆どであった。その時代に、この女の容姿や銀の髪、銀の双眸は異端であった。

だが、女は人を愛し、平和を愛していた。

ある日 女は喉の乾きに我慢が出来ずに禁断の龍の実を食べてしまった事から、その体の中に龍の血を取入れた。

それは、女を手に入れる為に、男達が戦いを始める切っ掛けとなった。 瞬く間に世界は荒れ、女は神から罰として、その龍の血を持つ者は、全て男として産まれる事になった。その龍の血が、また争いごととして使われないようにする為だった。 時既に女はその胎の中に子を宿していた。

「どうか、トステーベ神、どうか。この子だけは私から取らないで下さい。この子の命だけは・・・」

縋る様にトステーベ神に願う女に神の大きな御手は、女の胎へと行くくと白く光った。

神は、女に告げた。龍の血が何代かに渡って、お前と同じ純粋な龍の血になる時は、星の数ほどに広がるお前の民の中から、産まれて来る子孫達の中の一人、または2人だけ、完全なる純粋な龍の血を持つ者が現れるだろう。その者は、生まれながらに銀の髪を纏い、灰色の瞳を持つ、利発な子供となって世に出てくるであろう。

その者は、お前の魂を持つ者だ。お前は、これから三度、自分の呪われた血で世界が火の海へと変わって行く様を見る事になる。それがお前への罰だ。

女よ、お前は代々、その龍の血を横しまな者達から守れ。

女は震えながら神に訴えた。

「どうやって、その龍の血を持つ子供が産まれた時に、私の子孫達を守れましようか？」

神は、その者が産まれし時、二つの命と一緒に出て来る。一つは純粹なる龍の血を持つお前の魂が入った子供とそしてその者を守るべきにして産まれた子供だ。

その話を聞いているうちに、何だか俺って貧乏くじを引いているような気がするって思ったよ。結局、一昔前にやった自分の過ちを今の俺に尻拭いしろって、そう言う意味なんだよな……。
身に覚えがない事だけど、昔の自分がやってしまった事に、怒りを感じた。

「なあ、ジョイ。そういや俺が居た世界でもあったよな……ドラゴンフルーツって言うのが。もしかして、それって龍の実なのか？」

禍々しいようなショッキングピンクの果実。何処をどう見ても『食えるもんなら食ってみな！』ってケンカを売っているような果実だ。

ジョイは笑いながら俺の頭を撫でて来た。

「違うよホープ。あれは、たまたまそれを発見したヤツが付けた名前だ。龍の実は、あれ以来 誰も見つけてはいないし、実りもしない。お前が食べてしまったからな」

「ジョイ。お前、俺を慰めてるのか？それとも、俺の古傷に爪で引っ掻いて塩を塗っているのか？どっちだよ」

「そうですね。両方です。大体、ホープが食べたからいけないんですよ」

コイツに何言っても、墓穴を掘る事にしかならないと分かった。

俺は、神様に貰ったこの世界の地図を広げると赤い雫の首飾りを地図の上にそつと置いた。首飾りは、ひとりでに動くとエルドラレツドとエルドラールドの間にある死の谷の近くで止った。

あちゃー。どうやら俺達が舞い降りた場所が、其処らしいな．．．．。

よりに寄って死の谷だとはな．．。

苦笑しながらも、ホープは首飾りを着けると赤い雫を服の下へ隠した。

自分の勘だと、この雫は俺の血の可能性が高いからな．．．。気をつけねば．．．。

ジョイと共に荒れ果てた荒野を歩き出した2人。

目の前に広がる荒涼とした大地には、木どころか、草一本も生えていない。

空に浮かぶのは灼熱の太陽が三つ。一つで良いだろ！一つで！それが三つも出ているから、暑さも三倍だ。

フラフラになりながらも歩いているとジョイは凄く元気そうだ。

何しろ自分の足で歩いていないからな。それを知ったホープは、大きく溜息をつくと頂垂れた。

「はー。馬鹿正直に、歩いていた俺が馬鹿なのか．．．。それなら、新幹線で一気に此処を突っ切ろうぜ！」

頭の中のイメージは、東京駅！新幹線が入って来た所を想像して、頭の中で出発の合図である音楽が流れる。ファン！と言う発車音と共に、ホープの体は矢のように早く荒野の彼方へと消えて行った。ジョイは、それを見て呆れた顔をしていた。

「アイツ馬鹿か？あの荒野の先は、谷だって言うのを忘れているだらう」

次の瞬間、地響きのような音がすると、二つの頭を持った禿鷹達が群れをなして空へと舞い上がって行った。ジョイは苦笑しながらも、「アイツは面白いヤツだ」と呟くとホープの元へと向って行った。

優太の憂鬱？

砂埃と一緒にド派手に地上にランディングしたホープは、顔を地面から引き上げた。

「信じられー。俺まだ生きてるなんて・・・」

普通なら、死んでいるんだろうな・・・俺はかすり傷も無い。フラフラと立ち上がるとパタパタと砂埃を払った。

ペツと口の中に入った砂を吐き捨てたホープは、呟くと口の中がジヤリジヤリした砂の粒が歯の間に入ってしまった事に、気がついた。周りを見渡しても噴水や水道などと言う物はない。

井戸も無ければ川も無い。口を濯ぎたいがどうすれば良いのか迷っていた。その時にホープの頭の中でピカンと豆電球が光った。

魔法で地下水をくみ上げれば良いんじゃないか。もしそれで、この土地が潤えば、死の谷なんて呼ばれずにパラダイスって言う風には呼ばれるかも知れねーしな。ケケケ 変な含み笑いをしていた。

初めは、自分の血を使おうかと思っていたが、神様に言われていた事を思い出した。

「ホープ。お前の血は、一滴がこの世界で暮らす人の一生懸かって出すだけの給料と同等分の価値があるのだ。使う時には、必ず気をつけるのだ」

ホープは首を傾げると自分の手を見つめた。

青空にギラツク三つの太陽を睨みながら、自分の手のひらを太陽に透かしてみた。

自分に流れる血が、人々を狂わせるんだと知らされた時に、ホープは自分の頭の中に一番先に浮かんだのは、姉の百合香だった。

あの事件から大人しかった百合香が、凶暴と言えるくらいに自分に対して冷たく当たって来たのは、全て俺の血の所為なんだ．．．。

俺は、深呼吸をして両手をパンと音を立てて合わせると、地面に両手を着いた。

魔法陣など描か無きやならない事など知らなかった俺は、頭の中で念じるだけ念じていた。

すると、何も無かった岩と砂の大地に、ポォーッと淡い鬼火のような光が浮き出て来た。

初めは、俺の周りから薄らと少しずつ出て来た鬼火が、大円と小円を幾つも混ぜ、見た事の無い奇怪な文字が所々に浮き出て来た。俺は、本能が示すままに水を求めている事と、この砂漠地帯を緑豊かなオアシスに変えたいと願った。

俺の魔法って、何処まで出来るのかなんて俺自身わかんねー。

だけど、クヨクヨ悩むよりも、此処が自然豊かな土地になれば死の谷みたいな、ベタでダークな名前は無くなる。

ニヤリと笑った俺は、右手の人差し指に魔力を集中して溜めると、一滴の血を出させた。

俺の血は、小さな宝石の粒となって魔法陣の中心に落ちて行った。ポチャン．．．。

血が魔法陣の中に落ちた後、波紋を描く様にうねってく。

俺の周りにいつの間居たのか、風の精霊や水の精霊、火の精霊、森林の精霊達が不思議そうな顔で俺を見てる。

よく絵本とかで出て来る様な、小さな精霊ではなくて、背丈も俺と同じか、それ以上だ。見てくれは不細工な精霊などいない。男なのか女なのか分からない、中性的な感じた。

水の精霊は、アルブルと自分で名を名乗って来た。

水色のドレスを着ているって事は女のだろう。髪は黒で長くしつとりとしている。

瞳は藍色だ肌の色は白い。アルブルが空中に舞う度に、水が何処か

らとも無く水しぶきとして俺の顔にかかる。

俺がここに泉を作りたいと言い出すと、アルブルは不思議そうな顔で言って来た。

「あなたの口の中にある砂を取るためだけなら、その腰に着けている革袋一杯の水でも良いんじゃないの？」

確かに、言われてみればその方が良いかも知れない。だが、俺は自分だけが満足するわけにはいかないんだ。

「俺は、自分だけ満足すれば良いって言うヤツじゃないんだ。ここは、草も木も生えない不毛の土地。そんな土地に迷い込んだ他の人の為に作りたいんだ。ここは、死の谷だろ？それをオアシスにしたいんだよ」

水の精霊アルブルは、腕を組むと面白そうに俺を見つめている。

「あんた、変わっている。普通、人間、我が俤」

だろうな．．．．俺は苦笑しながらも、アルブルが言っている事に理解を示す。

そういや．．よく百合香にも言われていたっけ、俺が小さい頃は泣き虫で虐められっこだったから、百合香が「どいつに虐められたの？私が、搦じ伏せてやる！」そんな事を言っただけから俺は、いつも「百合香．．ケンカはケンカしか産まないんだよ。だから、話し合いで済ませたいんだ。俺を殴った方も何か事情があつたんだよ。俺はそいつの本当の痛みを知りたい。そして取り除いてやりたい」そんな事を言うと、百合香から「ダメ優太。あんたはお人好しで変わっているわ。そんなんだから舐められるのよ」呆れられていたな．．。

俺は、争いたく無いんだ。人を傷つけたく無い。だから相手の気持ちになっただけで行動する様にしたんだ。

水の精霊アルブルは、俺の考えを読んだのか、肩を竦めると歌を歌い出した。

その歌が文字となって現れ、光る淡いブルーの色に輝くと驚いた事に、荒涼とした大地から少しずつ砂煙が上がって来た。土が何かに押される様に固い岩をも押し上げてく。じわじわと地面が湿って来ると地下水が湧いて出て来た。

大きな泉が出来て俺は嬉しかったが、これだけではまたすぐに泉は枯れてしまうだろう。

ならば、泉の元となるような森を森林の妖精に作ってもらおうとするか、俺は、森林の精霊に近づくと「此処に森林を作って欲しい」と願った。

森林の精霊はサドルーナと名乗った。コイツは男なのだろうか？緑色のリクートスーツ姿。結構カッコいい。切れ長の瞳からは深い緑色の双眸が、こっちを見ている。薄い唇から発せられる言葉はただ、己の名だけ。どうやらこのサドルーナは、ツンデレさんなのか、それともただの人見知りのイケメンなのだろう。薄い緑のマントを身に纏って、俺を見据えている。

サドルーナは、何も俺に聞かずにただ俺が願う森林を泉の周りに作ってくれた。

火の精霊は、フラァ。赤毛のお下げ髪をした可愛い子だ。

顔には愛嬌と言うようなそばかすがある。瞳は茶色で美女と言うよりも、美少女とか言った方が良いのだろう。とにかく屈託の無い笑顔が可愛い。5才の頃の百合香を思い出させるほど、笑顔が愛らしい火の精霊は、フワフワの朱色のドレスを身に纏っている。

風の精霊は、ズーラトラと名乗ると消えて行った。彼は、サドルーナと同じようなスーツ姿だった。ただ違うのが彼の瞳の色が、俺の血の様に紅い。それは、あの時の誘拐犯を思い出してしまう程だ。風の精霊ズーラトラは、俺の思考を読んでいたのか、黙っていた。

四人の精霊達は、俺にまた何か願い事をしたい時は、我々の名を呼

べと言つて来た。

俺は、砂だらけとなつた口の中を濯ぐために、泉の水を両手ですくうと濯ぎ出した。

砂だらけになつた服を脱いで赤い雫の首飾りを首から下げて、俺は泉の中へ入って行つた。

優太の憂鬱？

ゆったりと泉に使っているととても気持ち良い。

「ぱちゃ．．。ぱちゃ．．と泉の中で身を任せて泳いでいると、ジェイが物凄い勢いで走って来た。

優雅に水に浸かっている俺を見て、指を指して来た。

「おい。ジョイ。指差すのは良く無いぞ」

それでも指を指しているジョイ。

もしかして、差しているのは、俺じゃなくて、俺の後なのか？

ふとそう思っただけ俺は、自分の後を振り返ると巨大な黒い影が俺の後に立っていた。

これって、よくファンタジー世界でよくあるヤツ？

巨大なナマズが俺の前で立ち泳ぎしていた。

急いで岸まで泳ぎ付こうとするが、慌てている所為もあって上手く前に進まない。それどころか、巨大なナマズは俺を見てニヤリと笑った。（目が光っていたから、笑ったんだ！）

ナマズは、いきなり大きく口をパクツと開けると俺を吸い込もうとして来た。

「うわゝ！ナマズいナマズい！俺魚類ダメなんだってばゝ！特に、ナマズはヒゲが付いているだけで、嫌なんだよゝ！誰か助けてゝ！」

俺の甲高い声が青空に響き渡った。

その瞬間、ナマズの額にグサリと刺さっている一本の槍。

後一步の所で俺は、ナマズに食われそうになっていたから、この隙に急いで泳いで逃げているが、運が悪い事に、俺の足が．．こむら返りを起こしちゃった。

腰も抜けてしまい、俺の体は泉の中へと引きずられる様に沈んで行った。

泉の水の中から見える太陽は、幻想的だ。

ゆらゆらと揺れる三つの太陽が、薄い緑色に見えて来る。息も苦しく無いから、俺．．．．もう死ぬんだな．．．なんて冷静に考えてしまった。俺の背中が、泉の深い底の砂地にやんわりと当たると、俺は静かに目を閉じた。

もう疲れた。こんな呪われた血なんて無い方が、この世界の人の為になるよ。きつと。

俺は誰も傷つけたく無いし、俺も傷つきたく無い。誰にも哀しんで欲しく無い。なら、いつそ俺がこのままこの泉の奥底深くで眠っていれば良い．．．．。

薄れる意識の中で、誰かが俺の腕を引っ張って居る感じがした。

泉の中でも、月の様に光り輝く僕の銀髪が、水面に向かって揺れている。

綺麗．．．．。

唇に当たる柔らかな感触．．．。

何度も何度も息を吹き込んで来る。

ウ．．ウゲツ！

喉に詰まっていた水を吐き出した俺は、薄らと瞳を開けた。

俺の目の前には、ジョイではなくて見知らぬ男が俺を解放してくれていた。

ぼんやりとした頭を一気にフル回転で起動させると、僕は自分も何にも身に纏っていない事を知った。

僕が、身につけている物は「紅の雫」を首から下げているだけだ。

つまり、素っ裸なのだ。

僕は恥ずかしさのあまり、自分の両手で胸を隠すと、俯いて目を伏せた。

男は、俺に自分のマントを羽織らせると、立ち去ろうとしていた。

待つて！と言おうとしたが、砂も水も大量に喉の奥深くか肺にまでも入っていたのだろう、声が出ない。

咽せる様に、俺はゴホゴホと咳き込むと男は、慌てて俺の背中を摩ってくれた。

一体、この男は何者なんだろう？

ジヨイが遅れて俺の所にやって来た。

「ホープ！大丈夫かい？」

「ゴホゴホ・・・」

俺は手で一生懸命に大丈夫だけど、器官に水と一緒に砂が入ってしまったて上手く喋れない！と身ぶり手振りでジヨイに説明していた。ジヨイは、俺の喉に首飾りの紅の雫をチョンと注すと、ポウツと触れた所から温かく感じて来た。喉と肺に少し入っていた水と砂が、全て取れたようだ。

少し怖々に声を出してみる。

「あああ・・・あ」

良かった声が出る。

それで、俺は安堵したのかジヨイに縋ってポロポロと泣き出してしまった。

何かこれって、裸で泣いている銀髪の美少女ってヤツ！？

まるで、人魚 みたいだな。

目の前の男の人は、俺の瞳を見て驚いた顔をしていた。
そう今の俺の瞳は、銀色に光っていたのだ。それはこの世界の伝説
の少女を表す色だった。

「月の光を集めた様な眩い銀髪．．．．．月の様に光り輝く
銀色の双眸．．．．龍の血を持つ娘．．．。」

その人が口にした単語を俺は耳にした時に、「．ジョイ．．．
！ふ、．服を！早く！」そう言っていると、その場から立ち去ろうと勢
い良く立ち上がると、俺は迂闊にもフラリと倒れてしまった。
ジョイは、俺の体力が消耗してしまった事と、今 自分の目の前に
居る男の事でその場に立ち尽くしていただけた。

薄れ行く俺の意識の中で「姫．．．。やっと見つけました．．．
．ふいへ．．．。」そう聞こえて来た。
俺の意識は、そこで切れてしまった。

優太の憂鬱 ？（後書き）

ナマズって食べた事ありますか？

私があります。結構泥臭いです。アメリカの中央西部になると気合いでナマズを獲ります。エサ．．．ですか？自分の腕です。
ワイルド！

優太の憂鬱？ 第三日目

「う、ううん」

寝返りを打つと手と顔には、柔らかい感触が伝わる。

「此处．．何处？」

目が覚めると、そこは天井が高くフワフワの広い見知らぬ部屋だった。俺は、丁寧にもベッドの上に寝かされていた。ゆっくり辺りを見渡すと、ベッドに天蓋が付いている。それに俺が居るこの一見お姫様と言わんばかりの部屋は、40畳あるうかと思う程広い。

俺は、白い絹のドレスを着せられている。自分で着替えた記憶はない。なら一体誰に．．．？

疑問だけが残っている。

あの俺を巨大ナマズから助け出してくれたのは、一体誰なんだ？

キングサイズのベッドの上で考え事をしていた俺は、自分の側にジョイが居ない事に気がついた。

ジョイは、俺を守っていると言っていたのに．．．。

ベッドから起き上がりふらふらと窓辺に立つと外は、もう薄暗くなっていた。

部屋に備え付けてある魔法石の一つである火の石に寄って光が作られている。

「ふん。電気じゃないんだ」

その光の反射で、ホープが窓の外を見ようとした時に、自分の顔が窓ガラスに反射して見えた。

「ひ、瞳が．．． 銀色に戻っている」

確かにジョイから、自分の力を使うと魔法に寄って変えてもらった僕の瞳が、元の銀色に戻ると言われていたのは覚えている。と言う事は、俺を助けたあの男にも、この瞳を見られたのだな。

自分の瞳の色を他の人に見られてしまったと狼狽していたホープは、自分の頭の中に血を抜き取られてしまう事しか、浮かばなかった。ほぼパニック状態に陥ったホープは、この部屋から抜け出す事しか考えていない。

部屋の窓からは、朝日が差し込んで来ている。

恨めしい程の太陽の光。

それも三つもある太陽。元の世界の太陽みたく一つで十分なのにさ。そんな事を言っているホープは、漸く気がついた。

今、この場所が何処にあるのかを。

自分の目の前を巨大ナマズが優々と泳いで行った。

それを見たホープは、全身鳥肌物で、窓から離れると急いでドアの方へと向う。

「ブエブエブギヤア！」

日本語にもならない叫びをあげてしまった俺。

俺ってば、魚が大の苦手。その中でも特にナマズって言うのが一番の苦手なのである。

あのヒゲが、まるで意志でも表しているのかと思う程、独りでに動いているのが、嫌なのだ。

広い部屋を駆け回り、俺はやっとの思いでドアの取っ手に手を付けた。

その時に、ギョーッと言う音と共に誰かがこの部屋に入ってきた。

俺は、数歩後へと下がると銀色の双眸を大きく見開いたまま、今まさに誰かが入って来るのかと見ていた。

もし、ナマズだったら、俺は泡を吹いて倒れてしまっただろうとそんな弱気な事を考えていた。

しかし、そんな俺の考えとは裏腹に、ドアを開けたのは人間の手だった。

流れる清流を表すような色、ターコイズブルーの髪を持つ人間。

筋肉の付き方で、男なのだろう。そこまで筋肉ムキムキとは言わないが、無駄の無い体つきをしている。

身長は俺の倍近く……。デカイ。僕が160くらいの身長……

・と言つても、春から高校生の僕は、成長期なのだから、これからまだまだ伸びるのさ。死んだ婆さんも、爺さんも背がデカかったしな。両親達も、2人とも170を優に超えてる。

でも、ふと思つたんだが、今の俺は百合香の体になつてたんだ……。

あいつも成長期と言う事は、ないだろうな……。きっと。

身長と成長期の事を考えていた俺は、改めてこの部屋のドアを見つめていた。

「すっげー観音開きのフレンチドアかよ……。まるで　ード
「オブザリン　だな」と一人で納得する様に呟いていた。

この部屋の扉の高さが3メートル位あるから、何だか俺が小人みたいに感じるんだが……。全ては目の前にいるこの馬鹿でかいコイツの身長に合わせて作られているんだと納得した。

中に入ってきたデカイ男は、固まっている俺を見るなり、俺の目の前に跪いた。

「龍の血を持つ娘……。伝説の通り、輝く月の光を身に纏うようなその銀の髪に、月を光を宿したその瞳……」

おい、こいつって俺を落とそうとしているのか？

俺はまるで羞恥プレイでもされているような気分だった。俺だってそんな齒の浮くような台詞は言わない。と言うか言える訳無いだろ！ 本当に聞いているこっちが恥ずかしくなってしまう。

相手は、俺がそんな事を思っているとは知らないのだろう．．俺の手を取ると口付けをして来た。

そんな目の前の男の紳士的な態度に、俺は驚いて後ずさりをしていく。

俺の頭の中には、危険信号が点滅中だ。

一体．．．何者？

優太の憂鬱？

俺は、見知らぬ男に手を取られ、口付けをされている。手を振りほどく様にして自分の手を胸元にやると男は、跪いたまま俺を見ている。この世界に召還されて、俺はたったの三日間だっているのに、何でこんな目に遭わなきゃなんないのさ！運命ってヤツを恨んでしまふ……。

そう言えば……ジョイ！俺の護り手なんだろ！？

ホープは、当たりをキョロキョロと見回していたが、ジョイらしき者は居なかった。なら、コイツに聞くしかない……。

銀の双眸を光らせると今にも目からビームが出そうな位、男を睨みつけた。

「ジョイ……ジョイは？オ……俺の護り手のジョイ……
ジョイは何処なのさ」

俺がジョイを探している事を知った男は、パチンと指を鳴らすと、今閉めた筈のフレンチドアが開くと、衛兵に伴われたジョイが連れて来られた。

「ジョイ……！」

俺は、ジョイに会えた嬉しさにジョイに抱きついた。心細さと苦手な大ナマズが窓の外から、俺を見ていると言う事で涙がポロポロと出て来る。そんなオレをジョイは優しく抱き締めてくれた。

膝を折り、俺の目線まで下りてくれるジョイは、何処となくいつもよりも優しい。いつもなら、俺にお調子者のダメホープと言っているのだが、今日は違う。一体どうしたんだ？

僕は首を傾げている。

「ジョイ。此処はどこだ？」

「ホープ．．．あなたは今、女性なのですから、もう少し言葉使いに気をつけてください。私と言ってみましょう。良いですね！」
俺．．．じゃなくって、私はため息をつきながらジョイに向き直った。

銀色の双眸を光らせると、俺の．．．．．じゃない私の前に跪いている男を指差した。

「ジョイ。此処は、何処なの？！そして、私の手をさっきから食べ物の様に唇をつけて来る、このスケコマシは一体誰？！」

「ず、スケコマシ．．．．」

突然 ホープにそう言われた男は、面食らった様に呟くと、次に豪快に笑い始めた。

「こいつは面白い。俺の事をスケコマシと言って来る女が伝説の姫君だとは思ひもなかったぜ。流石は龍の血を持つ娘だ！はははっははは！」

優太の憂鬱？ 伝説の都市 アクアトピア

「ジョイ。此処は、何処なの？！そして、私の手をさつきから食べ物の様に唇をつけて来る、このスケコマシは一体誰？！」

「す、スケコマシ．．．」突然ホープにそう言われた男は、面食らった様に呟くと、次に豪快に笑い始めた。

「こいつは面白い。俺の事をスケコマシと言って来る女が伝説の姫君だとは思ひもなかったぜ。はははははははは」

男は、面白そうにオレ．．．じゃなかった私の長い銀髪を一房掴むと、私の髪に口付けをした。

例え心の声でも、ジョイには全て聞こえているらしく、俺と心の声で言おうものなら射る様な目つきで俺を．．．いや私を見ている。

さつきから、鳥肌が立ちまくりなんだけどさ．．．

別に髪の毛一本一本に神経が生えている訳じゃないが、な．．．何だよこの羞恥プレイは．．．！？

ホープは、自分の顔が完熟トマトの様に真っ赤に一気に染まっているのが、自分でも分かった。

そんな初心なホープの反応を見て、面白そうに男はホープの細く白い手首を掴むと素直に自分の思った事を言ってきた。

「折れそうなくらい、細い手首だな」

それを聞いただけで、ホープは真っ赤になる。

今、まさに自分は男の腕の中に居る。自分の華奢な腰を男の逞しい腕で抱き締められているから、動こうにも動けない。ただ身動きが取れないから、男の腕の中でジタバタしているだけなのだ。

「お．．．お戯れは、お止め下さい．．．。それよりも、此処は何処なんです。」

必死になつてホープは、見知らぬ男の腕の中からどうやって逃げようかと考えていた。

「アクアトピアだ。」

「アクアトピア？ そんな国の名は聞いた事がありません。早く私を下ろして。」

ホープの頭の中にはこの世界の地図が瞬時に浮かび上がったが、幾ら探してもアクアトピアなどと言う国は見つからないのである。

男は、ホープを抱き締めたままベッドまで運ぶと、そつとホープをベッドの上に寝かせた。

身の危険を感じたホープは、何とかこの男の魔の手から逃げようと上体を起こして、少しずつ後ずさりをしていた。

もう少しで、この広い大きなベッドから下りられる！と思つた瞬間、巨大な大ナマズが急接近して来た。嫌な気配を感じたホープは、ふと恐いもの見たさで窓の方を振り返ると、其処には窓一面に映る巨大ナマズの顔があつた。

ジヨイの方へ逃げようと必死になつて誰かにしがみついた。

「ほう。伝説の姫君は 我が家の番犬が苦手と見たな。姫、アレはポチです」

ポチ？ 番犬？ アレはどう見たつて、魚だ。しかもナマズ！それがどうやって番犬になるんだ？！

思わず突っ込みそうになつたホープは、ふと気がついた。

窓の外から見える風景は、地上の物ではない……。

「水の中の都市？そんなの神様だって教えてくれなかった……」

ホープの言葉に、男は腕を組むと低いテノール音で心地よく私に言ってきた。

「それは、地上の話だからだ。アクアトピアは、2000年前に滅んでいた。最後の予言者ダスコ・ガマダの言葉では、地上の人間達が精霊界までも支配しようとしていると。この精霊界の高い文化を薄汚い人間達は、真綿で我らの首を絞める如く少しずつ奪って行ったのさ。その後、此处は不毛の地―即ち死の谷と呼ばれる様になった」

ホープの腕を掴んでいた男は自分の胸にホープの手を乗せるとこの国アクアトピアの悲惨な歴史の事を話してくれた。

「水の中でしか生きられなかった弱い力を持つ物達は、泉の水が無くなると直ぐに力つきてしまった。

何とか生き延びた俺達は、自分達に魔法をかけ水の無い陸の上でも生きられる様に、術を施した。いつか俺達の国、アクアトピアを蘇らせてくれる伝説の姫君に会える事を夢見て」

と……言う事は、オレが……じゃなかった私が、精霊達を召還して作らせた、この泉と言うか、湖がアクアトピアと言う事なのか……。

じゃあ、この死の谷で盗賊と恐れられている人達は、元々はこのアクアトピアの住人で人間を憎んでいたと。だから、ここ死の谷に入ってきた人間を次々に襲ったと言う訳なのか……。

考え事を頭の中で巡らせていたホープの顎を引き上げた男は、そつと顔を近づけると、掠めるように唇を合わせた。

「お．．．．．orz 落ち込む．．．私のファーストキスが男に寄つて奪われるなんて．．．」

落ち込んでいたホープに追い打ちをかけるように、ジェイが私にトドメを差して来た。

「いえ、ファーストキスではありませんよ。だって、この方、先ほどあなたを助ける為に人工呼吸を何度もやっていたもの」

じ、人工呼吸．．．ってマウス「ツウ」マウス？

ホープのガラスの心は、ピキツと音を立てて崩れ始めた。

銀の双眸を潤ませて、ホープは男の横つ面を思いつきり平手打ちした。

心地良いパアンと言う音が寝室内に響いた。

「名を名乗れ！」

ホープは、今にも精霊達を呼び出さんとしている。

そんなホープの反応を見て男は両肩を竦めた。

「水の中で溺れた姫を助けてやったのに、その恩人に対してこの態度とは、伝説の姫もただの小娘だったって訳か。俺の名を知りたかったら、俺の寝室へくればいい。だが、無事には返さないけどな。此処から出たければ、出るのは構わないが、外には、ポチが待っているからな。地上に出たければ、オレの名を知る事だな。そうすれば、出してやる」

な．．．なんて事だ。オレは．．．いや、私は囚われの姫となつてしまったのか．．．。

頂垂れるホープの肩をジョイは、優しく抱き締めてくれていた。

「ジョイ．．．。何故、教えてくれなかったんだ。このアクアトピアの事を．．。」

「それは、あなたが見境なく”新幹線”なる物と同じ様に猛スピードで、この谷を飛び越えようとなさったからです。それをしなければ、良かったのに．．．。あなたは自分の為ではなく、ここにいえ．．．他の人間がもし迷った時の事を考えて、巨大な湖を作ってしまったのですよ。初めは泉だったのですが、周りの森林が水を呼び、あなたが一晩眠っている間に、泉が湖へと変化して行つたのです。こんな風に」

ジョイは、神様から貰った地図を広げるとこの世界で一番面積が大きい死の谷を赤く丸で囲んだ。

どうやって、あの男の名を知れば良いんだ．．．。

優太の憂鬱？ オレって生け贄？（改）

「水の中で溺れた姫を助けてやったのに、その恩人に対してこの態度とは、伝説の姫もただの小娘だったって訳か。俺の名を知りたかったら、俺の寝室へくればいい。だが、無事には返さないけどな。此処から出たければ、出るのは構わないが、外には、ポチが待っているからな。地上に出たければ、オレの名を知る事だな。そうすれば、出してやる」

な．．．なんて事だ。オレは．．．いや、私は囚われの姫となつてしまったのか．．．．。

項垂れるホープの肩をジョイは、優しく抱き締めてくれていた。

「ジョイ．．．。何故、教えてくれなかったんだ。このアクアトピアの事を．．」

「それは、あなたが見境なく”新幹線”なる物と同じ様に猛スピードで、この谷を飛び越えようとなさったからです。それをしなければ、良かったのに．．．。あなたは自分の為ではなく、ここにいえ．．．他の人間がもし迷った時の事を考えて、巨大な湖を作ってしまったのですよ。初めは泉だったのですが、周りの森林が水を呼び、あなたが一晩眠っている間に、泉が湖へと変化して行っただけです。こんな風に」

ジョイは、神様から貰った地図を広げるとこの世界で一番面積が大きい死の谷を赤く丸で囲んだ。

どうやって、あの男の名を知れば良いんだ．．．。

ホープは真剣に悩んでいるとジョイが手をポンと叩き、オレ．．．
じゃなかった私の顔を見た。

何だか、嫌な予感がするのは、気のせいでしょうか．．．。

ホープに近づいたジョイは、グワシツと私の手を掴み風呂場へ連れて行った。

あー何だかドンドン嫌な予感がしてくる。

これって、まな板の上の鯉ならず、土鍋で調理されるヒヨコって感じだ．．．。

「ホープ。聞こえてますよ。それを言うなら、五右衛門でしょう。

釜茹での刑にされたんだから。馬鹿な事を言っただけで、さっさと入って下さい。湯浴みしますからね。しっかりとピカピカに洗うんですから！」

あ．．あの．．．そんなに目を光らせないで下さい。

はつきり言っただけです。教わるんじゃないで、生け贄にされそうで．．．。

生け贄？！

俺の心の声を聞いたジョイは、天使の笑顔で俺の髪を丁寧に洗っている。

「ホープ。オレではなく私と言いなさいと何度も教えたでしょう！」

顔中泡だらけになりながらも、プルプルと震えるお．．．じゃない、私の黄金の右手．．．。

さっき、一瞬物凄い殺気を感じたが、深くは考えない様にしよう．．．。

ジエイに二皮も三皮も剥かされるかと思う程、石鹸で擦られ、髪の毛は念入りに洗われるわで、お．．．じゃなかった、私は心身共にクタクタになっていた。

ぐったりしている私を抱き抱え、器用にも夜会用のドレスに着替えさせると私の背中を叩いて起こして来た。

「何すんじゃい！コラあ！」

そう言いそうになった。

だが、ジエイの後の窓ガラスから、光る二つの目．．．．。い、嫌だ．．．．み、見るな．．．．。目を離そうにも、恐いもの見たさなのか、ホープは凝視してしまっている。

うねる様に動く二本の長いヒゲを見た途端、一気に目眩を起こしたホープは、その場で失神した。

「う．．．うん．．．」

ゆっくり目を開けると、此処って初めに連れて来られた部屋とは違う所みたいだ．．．。

何だか妙に、妙に、そして最大級に嫌な予感がするんだけど．．．。って、オレってば何処で寝てんの！？

此処って、どう見ても神殿難だけど．．．。

やっぱ、オレってば生け贄なんだ．．．．この際もう目を瞑ったまま寝た振りで決めとくか。

幸い、暗い神殿には誰も居ないし。

広い神殿の生け贄を捧げるような寝台に寝かされていたホープは、自分の手足を縛っていたロープを解く為にキョロキョロと辺りを見渡した。

すると自分の近くに剣を地に差して跪いている偶像があった。見た所、像が手にしている剣は本物。

しめた！これなら、ロープを切る事が出来る！

寝台から転げ落ちる様に下りるとホープは、辺りを見渡した。落ちる時に、派手に捧げ物の皿とか器とかをひっくり返しちゃったのだ。

あんなに大きい音がしたのに、誰も確かめに来ないなんて．．．。不用心と言うより、大丈夫か？此処．．．。

肩と腰を思いつきり打ったが、生け贄で殺されるより数百倍マシだ。ホープは、芋虫が地上を這う様にウネウネと前進している。

こんな事になったのも全て、アイツの仕業だ！

ホープの頭の中では、自分に手を振りながら、にんまりと笑っているジョイがいる。

「これは、ホープが全て招いたことですからね。責任は自分で取りましょう。ホープ、蒔いたタネは自分で刈り取らなきゃいけないんですよ。分かりましたね」

苦虫を潰した顔で、モゴモゴと動きながら、漸く偶像の近くまで来たホープは、後ろ手に縛られている手首のロープを剣の歯にゴシゴシと擦り付けた。

「ッ！」

少し自分の肌まで切ってしまったようだ。

ポタリとホープの赤い血が、一滴 神殿の床に落ちる。

その途端、床がポウと鬼火の様に光り輝いている。

「誰だ！其処で何をしている！」

駆けつけた男は、オレを助けたあの男だった。

ホープの血がゆっくりと神殿の床に、また一つ赤い雫となって落ち

た。

（神様．．．ゴメン．．．。血を流しちゃったよ．．．。貴重な龍の娘の血を．．．）

男はホープに近づくと、縄を解いてくれた。手の切り傷から血がまた一筋流れている。

ホープは、震える声で男に言った。

「もしも、あんたに一欠片の憎しみも無いって言うなら、俺の血を舐めなよ。そうすれば、アンタの願いは叶う。だが、ほんの少しの憎しみがあれば、アンタは自分の闇に取り込まれることになるが、どうする？」

男は、俺の腕に舌を這わせた。ホープの体にビリビリと稲妻に打たれたような感覚が体中に走った。

百合香．．．ジョイ．．．助けてよ．．．

意識が朦朧としてくると、両膝が自然におれて、男の腕の中にホープは落ちた。

百合香の溜息 ？（前書き）

優太から百合香に場面が移ります。

百合香の溜息？

春休みが始まってすぐのピアノ教室の日。

何故か隣には、私の弟の優太がいる。何故か．．．私がこの言葉を使うのは、あの忌々しい事件を私は今でも忘れられないでいるからだ。優太は．．．あの子は多分、あの深紅の双眸を持った男に何をされたのかと言う事は、知らないだろうが、私はあの時あの子を．．．優太を守れなかった。今はもう亡くなった祖母から、「哀れな龍の血を持つ娘―あの子を．．．優太を守るように。それが、ガーディアンとして産まれたお前の宿命なのだよ。宿命からはどんなに足掻いても、逃れる事は出来ないのだ。流される様に自分の宿命と共に生きよ。」と言われて来た私。そりゃー幼い頃の私は、ガーディアンと言うのが一体どんな事なのか何て言う意味さえも知らなかった。今なら分かる。体の良い盾だわ。身をもつてでも龍の血を持つ娘を守れって言う事なのよね．．．。

私は、あの日まで優太の血がこの世界にとってどれだけの驚異になることなのか、知る由もなかった。本当にあの日まで．．．。祖母は、生前毎晩のように私達孫に、不思議な昔話を聞かせてくれた。

遙か昔、人は神になろうとして禁断の罪を犯した。その時代には、人間は沢山居たが、皆それぞれの役割を持って生きておった。そんな平和な時代に、人は初めて禁句を犯してしまう。禁句―それは、禁断の果実と呼ばれる「龍の実」を食べてしまった女から始まる。女は、美しく賢く誰からも好かれる人間であった。その時代の神と言われるトステーベ神にとっても愛された女であった。女は月の光をその頭上に纏わせたような、長く艶やかに光る白銀の髪をしていた。その不思議な髪と同じ色であった瞳は、銀色であった。

その頃の人間達は黒髪、黒目の者や、茶髪に茶目、または緑の目、

金色翠目や青目の者が殆どであった。その時代に女は異端であった。だが、女は人を愛し、平和を愛していた。

ある日 女は喉の乾きに我慢が出来ずに禁断の龍の実を食べてしまった事から、その体の中に龍の血を取入れた。

それは、女を手に入れる為に、男達が戦いを始める切っ掛けとなった。 瞬く間に世界は荒れ、女は神から罰として、その龍の血を持つ者は、全て男として産まれる事になった。その龍の血が、また争いごととして使われないようにする為だった。女はその胎の中に子を宿していた。

「どうか、神様、どうか。この子だけは私から取らないで下さい。この子の命だけは・・・。」

縋る様にトステーベ神に願う女に神の大きな御手は、女の胎へと行くときと白く光った。

神は、女に告げた。龍の血が何代かに渡って、お前と同じ純粋な龍の血になる時は、星の数ほどに広がるお前の民の中から、産まれて来る子孫達の中の一人だけ、完全なる純粋な龍の血を持つ者が現れるだろう。その者は、生まれながらに銀の髪を纏い、灰色の瞳を持つ、利発な子供となって世に出てくるであろう。女よ、お前は代々、その龍の血を横しまな者達から守れ。

女は震えながら神に訴えた。

「どうやって、その龍の血を持つ子供が産まれた時に、私の子孫達が守れましょうか？」

神は、その者が産まれし時、二つの命と一緒に出て来る。一つは純粋なる龍の血を持つお前の魂が入った子供とそしてその者を守るべきにして産まれた子供だ。

祖母は、この話は昔ロシアに居た頃に曾祖母から聞いた話だったよと教えてくれた。祖母も私と同じ銀色の髪をしているが、祖母には

双児の弟は居なかった。だから、祖母には純粹な龍の血は流れていなかったのだろう。私の瞳は祖母と同じ茶色だったし、髪の毛は母親と同じ明るいブロードだった。だが祖母は古から伝わる魔術で、私の髪と瞳の色を優太と同じにしてしまった。祖母はいつも私に口を酸っぱくする位に言っていた。

「優太を守れ。それがお前の使命だ」

幼い頃から言われて来た言葉を私は、あの時守る事が出来なかった。あの忌まわしいほどの澄み切った春の日。

バス停で、私達親子は隣町にあるピアノ教室に行く為のバスを待っていた。私と優太は、バスが来るまでの10分間が暇で暇でたまらなかった。そんな時だった。私が「優太！そうだ！かくれんぼしよう！」そう言ってしまった。あの時あんな事さえ言わなければ、こんな事にはならなかったのかも知れない。僅か5才の自分達には、優太の中に秘められた血がどれだけの事を起こすのかなんて、これっぽっちも真剣に考えてみた事なんてなかった。

2人で隠れんぼして遊んでいた時に、後から来た男に私は口を封じられ、優太と共に連れて行かれた。男は私の顎を掴んで、私の瞳を見ていた。

その時にチラリと見えた男の深紅の双眸に、恐怖で歯がガチガチとなった。

男は、チツと舌打をすると「コイツはガーディアンだったのか。」そう言うのと優太の方に向って近づいて行った。

だらりと垂れた優太の白い腕。そして流れるような銀の髪を見た男は、嬉しそうにクックククと喉を鳴らして笑っていた。

その薄ら笑いに、気がついた優太は、ゆっくりと目を覚ました。

綺麗な灰色の瞳に男は、ニヤリと笑うと優太の細く白い腕を掴んだ。

「優太、逃げて！」

私の声に驚きながらも、優太は目の前にいる男の瞳の力に動けないでいるようだった。

次の瞬間、男はナイフを取り出すと、優太の白い手首に突き付けると踊るようにナイフで優太の手首に傷を付けた。男は、呪文を唱えながら滴る優太の血を蒼い小瓶に入れた。

その小瓶は一見、ママが持っていた香水の小瓶に似ていたけど、周りに刻まれている文字か模様は、見た事がなかった。

ぐったりとした優太に男は、薄ら笑いを浮かべると次の瞬間、霞のごとく消えて行った。

私は、怖かった。一体これから、何が起ころうとしているのか、それを考えただけでも子供心に恐ろしくて、震えた。そんな私達を見つけたのは通りすがりの学生達だった。そいつらは、私を見ると近づいて来て、携帯で何処かに電話をしていた。そのすぐ後で、乗り込んで来た警察官達に私は保護された。男の警官を見る度に、あの深紅の双眸を思い出してしまう。それで、私には女の警察官が来るまでの間ずっと優太の側にいた。

「優太．．．。ごめんなさい。守れなくて、ごめんなさい。」

ぐったりとした優太に、何度も何度も謝っている幼い私の姿に、警官達の目には美しい姉弟愛だと言う風に取りられたのだろう。警察官から、祖父母は私を怒らないようにと何度も念を押していたから。私は、自分に課せられた義務を果たせなかった。それだけだ。

家に帰ってから、私は祖母に必死で謝っていた。私さえあんな事を言わなければ、こんな事にはならなかったのだと、何度も祖母に謝った。

祖母は、そんな私に何も言わなかった。ただ床に丸く指でなぞるとそこには、私達が攫われて一週間の間に起こった、この世界の出来事を見せるための呪文を唱え始めた。両親はそんな祖母を止めたが、

祖母は、「龍の血を持つ娘の魂を守る者は、その後の事も知らなければならぬ。例え、どんなに惨い事でも。」そう言って、両親を諫めた。

「百合香。見てご覧なさい。あなたが攫われて、優太の血が何者かに寄って取られた後の出来事だよ。お前はこの状況を知らなければならぬ。」

祖母の言葉に、ただ私はコクリと頷くと、床に一面に広がる不思議な現象を見ていた私の目には、優太の血を使って新しい爆弾を開発した国が他の国と戦争をしていた場面だった。その土地は、地上に一滴落とされた優太の血に寄って多くの山火事がまるで爆発するかのように瞬時に発生し、多くの人々の命が一瞬で消されて行った。それは、幼い百合香の心に深く残る事になった。

百合香の溜息？ ガーディアン宿命と責務

私が優太を守れなかったから．．．。

あの日、隠れんぼをしようなんて言ってしまったから、優太は私と一緒に攫われた。

龍の血を持つ娘．．．それは、男として生を受け、その血を消して悪に使われない様にガーディアンに守られなければならない。

龍の血は、平和を望む者には、平和を。悪を望む者には、全ての生きとし生けるもの達を生け贄と捧げてしまう大魔王をその身に宿らせてしまう。

そんなこと、私が知る分けないじゃない。

だって、私は、まだ幼稚園児だったんだもの。

思い出すだけでもムカムカして来る．．．。

ギリギリとペンのキャップを噛んでしまう百合香は、こんな春の長閑な風景が一番嫌いだった。どれだけ時が経とうとも、自分の心に付いてしまった傷は、取れない。

あの深紅の双眸をした男が、自分に近づいて来た時は、本当に死を感じた。百合香がガーディアンだと分かった時点で、男は道具を捨てる様に、自分の体を空中に投げ飛ばした。木製の空き箱で肩と脇腹を打った百合香は、男がゆっくりと自分の弟に近づいて行くのを助ける事も出来ずにただ見ていた。

あの後、世界で何が起こったかなんて私は知らなかった。

「百合香。見てご覧なさい。あなた達が攫われて、優太の血が何者かに寄って取られた後の出来事だよ。お前はこの状況を知らなければならぬ。」

祖母の言葉に、ただ私はコクリと頷くと、床に一面に広がる不思議な現象を見ていた私の目には、優太の血を使って新しい爆弾を開発した国が他の国と戦争をしていた場面だった。

その土地は、地上に一滴落とされた優太の血に寄って、多くの山火事がまるで爆発するかのように瞬時に発生した。

まるで戦争を思い起こさせるシーンだ。多くの人々の命が一瞬で消されて行った。

それは、幼い百合香の心に深く残る事になった。

祖母は、「龍の血は、破壊を求める者には、破壊を、平和を求める者には平和を求める。例えそれを求めている者が、ほんの少しでも悪に染まっていれば、龍の血は悪の力を発揮してしまうのだよ。以前、百年前にも同じような事があったのだ。しかも、その子供は優太そっくりの子供だったよ。」

それを聞いた百合香は、あの日の事を思い出していた。一つだけ思い出せない事があるのだ。何故だか知らない。祖母は、そつと百合香の頭に手を置くと記憶の系を取り出した。綿菓子綿の様に真っ白で、フワフワの物だった。それを床に置くと、記憶の系は床に呑み込まれて行った。

あの日の出来事だ。百合香に近づいた男は、百合香の髪の毛を数本引き抜くと銀から金茶色に変わった髪を見て、「ケツ！ガーディアンか。」口にすると、優太の方に歩み寄った。

優太の髪を数本引き抜くと何も色が変わらないのを確認して、ニヤリと気味悪く笑っていた。

次の瞬間、男と優太は一瞬だけ消えたのだ。

百合香の記憶の系の映像を見ていた祖母達は、「やはり……………」

100年前のあの悲劇は、優太の血の所為だったのか…。」と頂垂れていた。

祖母の話に寄ると、世界はその龍の血を持っていた子連れした男がいきなり現れて様々な戦争の道具を作り出して行ったと言う。

それを目の当たりにした当時の国々のトップは、その子供を手に入れる為に醜い争いを始めたのだ。

一人の気弱そうな青年に目を付けた、深紅の双眸の男は、その青年に優太の血を飲ませた。

気弱だった青年は、内に秘めた野望で言霊を操り、民衆の心を惹き付け、やがて一つの国の民を滅ぼし始めた。その青年が起こした政党は、やがて自国民を引き連れ、欧州全土を制圧しようと戦火の手を広げて行ったのだった。

ほんの少しの龍の血が、気弱だった男を全世界を震え上がらせる凶悪な独裁国家を作る事になった。そして、それは世界を戦争の渦へと巻き込んだ欧州の歴史は龍の血を巡った歴史となったのだと言う。今なら分かる、その気弱だった男が誰だったのか……。

あれ以来、百合香はガーディアンとして優太を守るのではなく、優太が自分で自分の身を守るようにすれば良いと思うようになった。だから、初等部から受験をして某お嬢様学校に入学したのも、優太から離れる為だった。

祖母が、他界し、その後を追う様にして、祖父が他界した。

祖父の最後の言葉は、「自分を責めるな。優太は、いつか気がつくだろう。自分の運命をだから、許してやれ。」そう言って私の手を握りしめて天国へと旅立って行った。

幼少のあの忌まわしい事件以来、私は男の人に対して極端に嫌うようになった。男の人を見る度に、あの深紅の双眸を持った男を思い出させるのだ。その事を思い出す度に、祖母に見せられた世界の悲劇が、まるでフラッシュバックのように私の頭の中に蘇って来る。

そんな中、トオルだけは別だった。幼馴染みとして、事件後も樹の影で泣いている私を見つけて、いつも慰めてくれていた。

トオルには、女子校に行く事にしたと言うと無言で頷いていた。

彼も、私の苦しみを分かってくれているんだと思うだけで、それだけで十分だった。

受験前日、私は優太を羽交い締めにして、試験を受けさせた。

もちろん、成績優秀な優太の事だ、落ちる事はない。運動テストも筆記テストも、行動テストも全て満点だったのは、この学校始まって以来の快挙だよと後で、中等科の担任に言われた私は、そのイメージを固守する為に、努力は惜しまなかった。

その後は、両親が海外に長期出張になるから、お前達も来いと言って来た。私は頑として首を縦に振る事はしなかった。ようやく、手に入れた私の「自由な世界」をそう簡単に手放せるものか。

両親は、渋々2人で海外に行く事になり、その両親が優太に「お前は男なんだから、百合香を守ってやれ。」そう一言告げると2人してルンルン気分で、海外へと行ってしまった。

かくして、私と優太の2人だけの生活が始まった。

昔から成績優秀な優太は、別に勉強しなくても、全国模試の成績はいつも全国で2位か1位だ。私は違う。そこで、家事の殆どが優太任せとなった。

百合香の溜息？

百合香の苦悩は、いつまでも続くのだ。

初等部の時は、ママと一緒に学校へと登校していたのだが、上級生になるに連れて、それは止める事にした。

母親は、娘の私の事も気遣ってはくれていたが、この家の跡取りとなるのは、私ではなく優太だ。

昔から優太は、体が弱かった。

少し寒い日になると直ぐに風邪を引くし、それが拗れると一週間程寝込むのはいつもの事だった。

だから、私も母親には甘えない様にしていた。

ガーディアンである私に出来る事は、優太の熱を取り除いてやって、自分の体の中に入れる事だけだ。

昔から、ガーディアンと呼ばれる者達は、体が丈夫に出来ている。

それは、世界を救う役目を持った者を守る為にそうなったのだと祖母から聞かされていた。

だからだろう。私は一度も風邪を引いた事などない。本当の健康優良児だ。

たまには、病気にでもなつて母親を独り占めしてみたいと思った事もあった。だが、それは我が侘なのだろう……。

熱につかされる優太を見ていると、何だか哀しくなる。

優太は気付いていないだろう。だけど、病気で寝込む度に謔言の様に言ってる。

「龍の血……なんて……い……らない……。僕を……
……自由にして……。か、解放して……。もう、人が……。
……傷つくのは沢山だ」

龍の血を引いている事で苦しんでいるのは、私だけじゃなかった。

優太が熱で学校を休んだ日、ママはいつも優太に付きっきりだ。もし分けなさそうに、私に行ってらっしゃいと言うママ。苦笑しながらも、行ってきましたと答えるといつもものバス停へと向う。

百合香の通学手段は、バスを使った物となる。

何処をどうやって調べたのか、百合香が乗るバスはいつも他校の男子学生で満員となっていた。

百合香が男嫌いな事を知っているからなのか、殆どそれは嫌がらせにしか思えなかった。

そんな時に知り合ったのが、小田マリアだった。

マリアは、ハキハキしている百合香とは違って、大人し目の女の子だった。

優太を女の子にしたら、きっとこんな感じになるのだろうな・・・そう思った百合香は、マリアとすぐに打ち解けた。

優太の卒業式が迫っている頃、マリアからの突然の告白。「優太君に伝えて欲しいの。金ボタンが欲しいって。」だけど、どうして私に言うかな？

だけど、マリアの顔は、トマトのように真っ赤になっていた。

親友の願いを無下にする訳にも行かず、私は優太を呼びつけて、マリアと引き合わせた。

優太は、タオルと一緒にやって来て、頭をポリポリと掻いていた。

「それくらいで良いなら、別に構わないけど。だけど、君 誰？」

そう優太は、マリアの事は何にも知らないのだ。何度か家にも連れて来ていたのに、何でマリアの事を知らないと言い出すんだ？ 男の世界とはそんな物なのか？そう思わせるほど、驚いたマリアは、目に涙を浮かべて震えていた。

驚いていた優太に、私は「私の親友であるマリアを泣かせたら、ど

うなるか分かっているんでしょ？」そう言つと羽交い締めポーズをとり始めた私を見て、優太の顔色は真っ青になっていた。

「それとも、優太は他に好きな子とか居るわけ？　どうなの！ハッキリ言いなさい！」

「居る分けねーだろう！　それに今は生徒会で忙しいんだしさ！　そんな暇はない！だから、百合香！放せ！！　く、首が絞まる！！！！」

左手で床をバンバンと叩く優太の様子に、私は満足した。
もう、ギブアップか……。情けない」

でも、この事で優太自身、好きな子は居ないと言っていた。
卒業式の後に会おうと無理矢理、優太に約束をさせると、マリアは私に抱きついて来た。

一応、父兄と言う事で、私はマリアを連れて優太の学校へ行つた。
他の保護者達への挨拶をして回っていたら、卒業式が始まった。
周りから「やっぱり、優太君は、凄いわね」。去年は送辞を読んだんでしょ？で、今年は答辞。それに、生徒会も引っ張ってやってい
たんですってね。お姉さんの百合香ちゃんはある有名女子校にトップ
で入っているし、良いわね」そんな私語が私とマリアの背中を行
き来している。

卒業式も無事に終わり、優太を連れて帰ろうとするとモッチーから
声をかけられた。

「おう！百合香！」

「叔父様。（外では猫をかぶる為にそう呼んでいる。）優太は？そ
ろそろHRも終わった頃だし、帰ろうと思うんだけど……。」

そんな私の言葉に、モッチーは、下駄箱で凄い人ばかりになっているのを指差した。

ん？あれは何？女の子達が群がっているんだけど．．．。

モッチーの話に寄ると、あれは優太のファンの子達だと言っていた。見れば、中には泣き出す子達も居る程だった。優太ってそんなに人気があつたんだ。

「え？でも、優太は好きな子は居ないって言っていたけど．．．」

そう口に出すとモッチーは、私の額を人差し指で小突いて悪戯好きの笑みを見せた。

「優太が女の子に一線を引くようになったのは、自分を守れなかったと言つて泣いていた、お前を守れなかった事が原因だそうだ。」

俺様魔王のモッチーに小突かれた額を手で撫でているとボロボロになった優太が、下駄箱から解放されて出て来た。

マリアに約束していたボタンは、袖のボタンさえも全て全部女の子達に奪り取られて、まるで山賊にでもあつたかのように、ヨレヨレの優太がそこにいた。

優太は、私達を見ると笑顔で「ゴメン。ボタンを死守出来なくて。だけど、これで良かったやるよ」そう言つて、マリアに自分の学ランを渡していた。

そんな優太を見たモッチーは、クスツと笑つと私に耳打ちして来た。

「アイツ、まさか自分を好きになる子が居ると思つても居なかったと言つていたぜ。それに、自分がモテることすら知らなかったらしい。女の子達がアイツのボタンを欲しがるのは、みんな百合香にあやかりたいからなんだろうな」なんて、真剣に思つてんだよ。ア

イツの鈍感さには呆れるよりも、面白れーよな」

優太のあまりの鈍感さに、目眩がして来た。

この日は、叔父であるモッチーの家で晩ご飯にありつく事になった。

「トオルと優太がお前のクラスに行くように手配しておいた。だから、宜しく頼むぜ。ガーディアン。それに、これからは俺の事をモッチーじゃなくて、先生と呼ぶ様にしろよ」

モッチーから言われた時は、思いつきご飯を喉に詰まらせるかと思っただ。

蒸せながらも、ご飯を胃へと送り込むと涙眼でモッチーを見つめた。モッチーは、涙眼になった私に「ワリーワリー。俺もお前達と同じ学校へ移動になったから、俺も一緒だ。だから、安心しろ。お前達の担任は俺に決まっているからな。だからといって授業をサボるなよ」そう言つと笑いながら、水割りを飲み干した。

百合香の溜息？ 異次元への扉

まさか、春休みになった日に異次元への扉が開かれるなんて思いも寄らなかった。もし、そうなる事が分かっていたら、あの日のピアノ教室はキャンセルしていたのに・・・。

コンクールも近い事から、休む訳にも行かず、私と優太は急いでバス停へと向った。バス停には、男子学生達の列が並んでいた。

モッチーや、トオル以外の男の姿を見るだけで、あの忌まわしい記憶が蘇って来る。私の足はまるでアスファルトに釘付けとなったように動かなくなった。そんな私に氣を使うように優太は、別のバスにしようか？と言って来たが、私達のピアノ教師は、時間にすぐ五月蠅い。

仕方無く、優太が携帯でピアノ教室に電話をかけると「もしもし、優太です。少し遅れますから、待っている人を先に見て下さい」そう言ってくれた。

ピアノ教室でも優太は、特別待遇だ。先生の覚えも高く、今まで幾つものコンクールの賞を取って来た。そんな優太に言われれば、先生も怒る事などない。

どうして、私は優太のようになれなかったのだろうか？

羨ましい。皆に大事にされて、愛される優太が羨ましく思えた。もし、入れ替われるのなら、私は優太になりたい。そんな事を思いながら、元来た道に戻っていると、トオルと会った。

空き地を通って行けば、下の道に降りられるし、そこまで出ればピアノ教室だって、歩いて5分だ。

いつの間にか、空き地を通って行く事になった三人。
春なのに、晴天続きで草が枯れて来てる。

背の高い草が、私の長い髪に巻き付きそうで怖かった。そんな事を知ってか、私の肩をグイッと引き寄せた優太は、自分が被っていた帽子を私に被せると長い髪の毛を器用に帽子の中に入れた。

「あ、ありがとう」

優太は、屈託のない笑顔で私に微笑みかけると前をズンズン歩いて行った。

トオルは、私の手を繋いで優太に遅れないようにと獣道を確かめながら歩いていった。

途中、足下に当たって来た変な形の石ころに興味が湧いて、つい2人を呼び止めた。私達の存在に気がついたかのように、石ころは、私達三人の前にまるで自分の意志でもあるかのように、転がって来た。

三人とも、転がって来た変な石ころを拾うと、手に取った。

三人の手に触れた石は、それぞれ色を変えたボックスへと変化して行った。

トオルの近くには青いボックスで金の模様が刻んであった。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであった。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであった。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振って来た。

「ボックス・・・反応アリ」

それに気がついた時、私達は白い光の中に吸い込まれて行った。

百合香の溜息？ 微睡みの中で

心地よい風が、百合香の髪を撫でる様に吹いている。たまに聞こえる音楽はモーツアルトの曲だ。気ままに歌う様に奏でて来る。

これって、優太が自分に言っていた「カンタービレ」の事だ。

モーツアルトのソナタ……。

優太が、10才の頃だったかな……。コンクールで弾いた曲だったわ。

あの白くて繊細で細い指から奏でられているとは思えない程、情熱的で聞いていた観客さえも魅了した。

優太は、狡い。何でも出来るもの。

私は、いつもステージの片隅から優太の秀でた能力をずっと見ているだけだったな……。

あの日も家では、優太のコンクール優勝パーティーをやっていたっけ。

そこには、トオルも招かれていた。

ガーディアン、ガーディアンっていつも家族から言われているけど、優太への不満が堪りに堪って言ってしまった言葉。

「もう……。私、優太のガーディアンなんて、嫌だ！だってそうでしょ！優太は何でも出来るんだもの。私は、もう比べられたく無いの！だから、別の私立女子校に編入するわ！」

私の言葉に、家族一同水を打った様にシンと静まり返ってしまった。そんな中、お母さんが「でも、ガーディアンの宿命は……」そう言いかけた時に、私は思いつきり母を睨んでしまった。

「優太！これからは自分の身は、自分で護んなさいよ！」

優太

あのこ

はとても傷ついた顔をしていた。

「私は、もうガーディアンは降りるから。髪も元の色に戻すわ。私は自分の人生を楽しみたいの！」

私の言葉に驚いていた優太は、目を丸くさせて私を見ていた。知らず知らずに自分の手に力が入り過ぎたのか、拳を作っていた。そんな私の肩を優しく抱いてくれるのは、モッチーだった。

モッチーの優しい藍色の瞳が（それ以上、言うな。百合香）そう言っていたけど、もう私の言葉を止める人（祖母）は、この世には存在しない。我慢に我慢をしていたんだから。

「私は、優太の身代わりじゃないの！」

言ってしまった後で、優太の俯いた表情を見た時に、哀しくなった。傷ついていたのは、私だけじゃなかった。優太もだったんだって、今頃になって気がついた。

百合香が気がつくと其処は、広い草原の世界だった。

だが、その草原は百合香が知っている緑ではなく、辺り一面白銀で覆われた世界だった。

「ここは、天国なの？」

そう呟いた百合香は、辺りを見渡すと自分の隣に一角獣のユニコーンが立っていた事に気がついた。

そのユニコーンは、雪の様に白い大地から音もなく出現した。白馬？と思ってしまいう程に白い馬の体には不似合いな角が馬の額から突

き出て居る。其の角は虹を思い起こさせる様な様な淡い七色の角をしている。鬘

たてがみ

は優太を思い出させる様な真つ暗な夜に一際温かく優しく照らすひ百合香を見るとお辞儀をして来た。

（偉大なる戦士ガーディアンよ。そのボックスを開けてみよ）

いきなり上から物を言つて来たユニコーンにむつと来た百合香は、自分の大きな手を見て驚いた。

少しは膨らんで来ていた胸も、今はまるでまな板のようにペツタンコだった。しかも股の間が何だがモソモソして来る。恐る恐る股間に触れると百合香は失神寸前になった。

口をパクパク鯉の様にさせている百合香に、ユニコーンは呆れたように声をかけて来た。

（あなたが望んだんですよ）

手首に残った傷も全てある……。と言う事は、私の体は優太の魂が、そして優太の体に私の魂が入っているって事なの？！驚きながらも、冷静になれと自分に言い聞かせている私は、呆れ顔のユニコーンに言われた事を思い出して、手の中にあるボックスを見つめた。

あれ？これって、間違っていない？

トオルの近くには青いボックスで金の模様が刻んであった。

優太の足下には、銀のボックスで朱と金の模様が刻んであった。

百合香の足下には、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであった。

三人が、それぞれのボックスを手にした時に、空から声が振つて来た。

「ボックス 反応アリ」

あの時の私の手の中にあつたのは、金のボックスで朱と銀の模様が刻んであつたものだ。だが、今の私の手の中には、優太が持つていた銀のボックスで朱と金の模様が刻んである。

どうやって開けるのだろうか．．．？

悩んだ挙げ句、箱をじっと見つめた。

百合香の溜息？ボックスなんてクソ食らえ

ボックスを発動させるですって？

ふん。何、上から目線で物を言ってるのよ。この馬！

タダでさえ自分の身体が男になっている事にショックを受けてるんだからね！ 整った優太の顔で、涙目になっている私って、他人から見ればどーよ？！

こんなボックスなんて捨ててやる！

手の中にあつたボックスを思いっきり遠くへと投げ捨てた私は、すつきりした。

ボックスは、大きく弧を描く様に、空の様に真つ白な平原の彼方へ消えて行った。

私は、鼻息も荒く手をパンパンと埃をはたく様に音を立てると、大きく伸びをした。

「大体、人に命令するのが、おかしいってンのよ！」

白い平原に腰を下ろした百合香は、ゴロリと横になるといつの間にかウトウトと眠りに入ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245u/>

three 龍の血を持つ娘

2011年9月22日17時27分発行